

関東学院

学院史資料室 ニュース・レター

No.27
2024.3

園舎とリニューアルされた園庭



ひかり文庫



関東学院のびのびのば園
(撮影：2023.8.18)

目次

はじめに	2
特集1 関東学院のびのびのば園 認定こども園移行10周年	
御手に導かれて	3
～変わったこと・変わらないこと そして未来へ引き継ぐこと～	5
地域に開かれたこども園として	10
幼稚園からこども園へ	15
特集2 関東学院150周年に向けて	
中学関東学院本校舎から学ぶ大正関東地震	20
坂田祐『新編 恩寵の生涯』より転載、「関東大震災 一神の護り」、P132-135	26
東北学院 大西晴樹院長・学長、関東学院 松田和憲学院長 対談	28
中学関東学院における「福音的キリスト教」の一断面	
—内村鑑三・高倉徳太郎 等をめぐって— (三)	34
史資料の紹介、渡部一高先生・編集後記	36

は じ め に

関東学院 学院長 松田 和憲

皆様の許に『関東学院学院史資料室 ニュース・レター』No.27をお届けできますこと、嬉しく思います。

前号では、「特集1」として関東学院小学校が昨年、創立70周年を迎えて、校長の岡崎先生に「三春台の風 関東学院小学校2012-2022」と題して過去10年間の小学校の歩みについて子細に記して頂きました。「特集2」では、「関東学院創立150周年に向けて」とのメインタイトルを掲げ、「変わりゆくキャンパス（金沢文庫キャンパス）」と題して、御園先生の遺稿となった「釜利谷（金沢文庫）キャンパス、お疲れさま!」、大越先生の「金沢文庫（釜利谷）キャンパス随想」、お二人とも、馴れ親しんだキャンパスが閉鎖されることになったことに対する特別な感慨が伝わってくる文を掲載いたしました。

本号においても、前号同様「特集1」「特集2」の形式を踏襲し、「特集1」では、数回に亘ったシリーズの各学校・各園の足跡を辿る最終章として、「こども園」として組織替えし10周年を迎えた「のびのびのば園」を取り上げました。

野庭幼稚園の歴史は35年以上と長いのですが、「認定こども園」として発足してから10年目の2023年1月21日、10周年記念礼拝及び式典を挙行了しました。幼稚園の歴史については過去何回か取り上げているので、今回は「こども園」発足10周年に当たり、現園長の仲程先生、副園長の平先生、主任の浦尻先生、そして順序が逆になりましたが、幼稚園から「こども園」に移行期の5年間、園長をさせて頂いたわたしがその

経緯、増改築の裏話など、自由に書かせて頂きました。

「特集2」としては、前号からのメインタイトル「関東学院150周年に向けて」は変えずに、ハード面、ソフト面から2本、掲載させて頂きました。まず、ハード面からの記事は、「中学関東学院本校舎から学ぶ大正関東地震」と題して、大学の建築・環境学部の高部洋教授に執筆頂いたものです。高部先生は「地震学」の専門家で、1919年1月27日に三春台の地に建てられた「中学関東学院」校舎が4年後に起きた「関東大地震」の出来事を経て、どのように変容したのか、地震学の立場から綿密な分析の記録を綴っておられます。この文は大変貴重な論文として記録に留めることができると思います。

「特集2」のソフト面の記事は、今年度の関東学院教員合同研修会で東北学院院長・大学長の大西晴樹先生の講演を受けて、大西先生とわたしとの対談を学院史資料室事務室 田中室長が文字起こしをして掲載したものです。これからのキリスト教学校の在り方・方向性にある種の示唆を与えてくれるものと思います。

2024年、学院創立140周年を迎えることになっていますが、この『関東学院学院史資料室 ニュース・レター』も特集号を組んで、150周年に向けて意義深いものにできればと願っています。多くの方々の協力を得て、No.27をお届けできますこと、感謝します。

皆様方の上に、主の恵みがありますよう、祈りつつ。



テンネー記念ホール（横浜・関内キャンパス）

御手に導かれて

学院長 松田 和憲

【はじめに】

わたしは、2009年4月から、帆刈猛園長の後任として野庭幼稚園園長を拝命し、それから5年間、園長を務めさせて頂きました。数年後、園は「こども園」として組織替えし、優れた園長先生のリーダーシップもあって定着し、去る2023年1月には、「関東学院のびのびの園 認定こども園10周年記念礼拝・式典」を行いました。今までの「こども園」としての活動、発展の様子については、仲程園長はじめ諸先生方が詳しく、生き生きと記しておられるので、わたしは「こども園」発足に至るまでの経緯、増改築するとの決断に導かれた理由等について、思い出を辿りながら自由に書かせて頂きたいと思います。



認定こども園10周年記念礼拝・式典

【園長になった当時の学院内の受け止め方】

当時、わたしは大学工学部、人間環境学部で週700名ほどの学生たちに「キリスト教学」を講じ、併せて、大学宗教主任、金沢八景キャンパス内にある関東学院教会主任牧師を務めておりましたが、親友の帆刈先生からのたつての願いを断り切れず、週1～2回程度顔を出せば良いからと言われて、今になって告白すれば、園長、法人理事の役目を「何とかなるかな」との軽い気持ちでお受けした次第です。しかし、現実はそのようにはいかず、想像を遥かに超えたものがありました。

当時、野庭幼稚園は、園舎も老朽化し、野庭団地に住む大半の子供たちはすでに成長して社会に巣立っていく途上にあり、園児の定員確保はたいへん難しい状態で、法人としても今後の園運営について、いささか消極的な受け止め方が大勢を占めておりました。何も

手を打たずにこのまま現状を維持するだけなら、最終的には「幕引き」を待つしかない情勢を看過する訳にもいかず、何度か1号館5階の内藤理事長に直談判を申し入れ、会ってくださったものの捗々しい返事を頂いたことはなく、いつも肩を落として、外に出てきた時のことを思い出しています。

【そのような中、1つの可能性が浮上】

2009年10月10日、関東学院は創立125周年記念式典を行い、それを機に、内藤理事長は勇退され、替わって、飯田理事長の代を迎え、財務担当常務理事として、増田日出雄前理事長が就任され、新しい体制での学院運営がスタートしました。

当時、園の運営責任を実際的に担っていたのが小高千恵先生で、わたしが登園した時にはいつも園の今後の傾向と対策について、夜遅くまで、「こうでもない、ああでもない」と言いつつ、しばしば激しい議論を重ねながらも、妙案を考え出すことはありませんでした。

しかし、ある時、小高先生が「幼稚園から認定こども園」にする案を持ち出してきて、結局、その案に希望を託すことにしたのですが、それからが大変でした。まず申請のための書類を揃えること、これは半端な作業ではなく、数年に亘って、小高先生が粘り強く、担ってくれました。それまで、何度、市役所、県庁等に足を運んだことか、この「こども園」発足に際して費やした小高先生の労にこの誌を借りて感謝したいと思います。

もう一つの問題は、老朽化した園舎を全面的に増改築することが必須条件として提示されたことです。それについて、どうしたらいいものか、思いあぐねていたとき、大学工学部の同僚である大塚雅之先生に相談した結果、建築の専門家として全国的に評価されている湯澤正信先生を紹介してくださいました。数日後、湯澤先生の研究室にわたしがお邪魔して協力をお願いした処、大事な園増改築のために協力を惜しまないとお約束してくださいました。それからの数年間、湯澤先生は多忙の中、園舎前のロータリー建設から始まり、難しい増改築の設計、建築の現場でのアドバイス、予算の立案まで、わたしたちの側に立って、惜しまずにご指導をしてくださいました。途中、先生は重い病を抱えながら、病院から電話にていろいろと指示

をくださいました。先生は2015年、65歳の若さで帰らぬ人になりましたが、湯澤先生のご尽力なくして、園の増改築は不可能であったことを思い、湯澤先生の献身的なお働きに心から感謝し、記憶にとどめさせて頂きたいと思います。



開園当時ののびのびのば園（2012年）

わたしはただ責任上、その一端を担ったに過ぎず、2009年からの5年間の間、主が必要に応じて、必要な担い手を起こし、わたしたちの思いを遥かに超えて、新しい事を起こして下さったと信じ、感謝を覚える者です。

そして、いま河合園長、井上園長に引き継がれ、そして仲程園長の時代に入り、更なる成長発展の時を迎えていることを嬉しく思います。どうか「のびのびのば園」が変わらない主の守りと導きによって支えられ、地域に根差した園としてこれからも良き教育・保育のわざを続けていかれることをお祈りしています。

もう一点加えるならば、増改築のための総予算は記憶が正しければ、4億3千万円ほどであったと思いますが、これは園として、すぐに引き出すことは到底考えられない額でした。小高先生と待ち合わせ、何度となく1号館5階の増田常務理事のお部屋にお邪魔し、その必要性を訴えたことでした。増田常務理事はその必要性を痛感し、飯田理事長にも取りなしてくださり、最終的には全額を支出することを承諾してくださり、理事会において、承認を得ることができたこと、今もなお、はっきりと覚えております。



2012年度の卒園式

【終わりに寄せて】

わたしは、一連の動向を想起するとき、これは人間の思いを超えて、背後に主の変わらぬ守りと導きがあったことを信じない訳には参りません。

～変わったこと・変わらないこと そして未来へ引き継ぐこと～

関東学院のびのびのば園 園長 仲程 剛

【はじめに】

認定こども園「関東学院のびのびのば園」の前身である「関東学院野庭幼稚園」は、1976年に港南区野庭にある野庭団地の中に建てられ、36年間に渡って野庭地域の幼児教育を担ってきました。

野庭団地は横浜市でも有数の大きな団地でしたが、昨今の少子高齢化の波にのまれた形で、野庭団地、そして隣接する野庭住宅の子どもの数が急激に減ってきました。そのため、近隣の小学校・中学校では統合・閉校が相次ぎ、また、野庭町周辺の幼稚園では、「数少ない園児の奪い合いになるのでは」との危機感が募ってきました。

一方、働く母親を支えるための保育園は、全国的にも不足しがちで、この野庭地域も含めた港南区や横浜市も、「保育園待機児童」を0人にするために、保育所を増やさざるを得ない状況となってきました。

そのような状況の中で、国の政策としても「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」を成立させ、それに基づいて、2006年10月に「こども園」という施設を創設しました。

この「こども園」（後に制度改正に伴って「認定こども園」という名称になりましたが）は、その求められる役割として、①教育基本法の学校の定義に基づき、幼児期の学校教育を行うこと（幼稚園機能）、②児童福祉法等に従い、保育の必要な子供の保育を行うこと（保育所機能）、③地域の事情や保護者の要請により、必要な子育て支援事業を行うことの三つの機能があることが示されていました。

関東学院野庭幼稚園でも、未就園児を含めた地域の子どもたちや保護者への支援をより丁寧に行うという使命と同時に、経営的な面からも「こども園」への移行を検討すべきだという声が現場の主事から上がりました。それを受け、当時の松田和憲園長（宗教主任を兼任）と法人本部の英断により、2012年に「認定こども園関東学院のびのびのば園」として、スタートしました。

この「のびのびのば園」と言う名称は、こども園の名称としていくつかの候補があった中、当時の職員にアンケートを取って決めました。

実は、アンケートの記入方法について職員間で混乱があったため、ふたを開けてみたら、多くの職員が「えっ、これに決まったの?」とってしまう程、

ダークホース的な「のびのびのば園」という名前になったということだそうです。それでも、「のびのび」という言葉に、本園の理念や職員の想いを込めつつ、印象に残る名前として、決定しました。

正直言って、「のびのびのば」という言葉は言いにくく、また聴き取りにくいために、電話では何度も聞き直されたりしますが、今では近隣の方々に「のびのば」や「のびのばさん」の愛称で親しまれています。

【認定こども園への移行】

「幼稚園」から「こども園」への移行は、決してスムーズとは言えませんでした。それは、その時期には「こども園」という施設がどのようなものか?どうあるべきか?が、誰もよく分かっていなかったことが大きな要因でした。

「こども園」というものがよく分かっていない状況の中では、当然のことながら、「幼稚園」を「こども園」にする意義や「こども園」の在り方、何よりも「こども園の職員としての想い」を、職員間で、しっかりと共有しきれなかったと思います。

幼稚園時代の職員の中には、「私は幼稚園の教諭であって保育士ではないから、保育のことは分からない」という想いや、実際問題としてシフト制の勤務体系では働けないということ等から、何人かの職員が辞めてしまいました。

それでも、時代のニーズに応え、前に進むために、新しく保育教諭を採用することで、こども園としての「のびのびのば園」がスタートしました。が、実際にこども園としての業務が始まると、案の定、職員の中での「幼稚園の常識」と「保育園の常識」がぶつかり合い、それぞれの職員が戸惑うだけでなく、園の方針として迷うことも多くありました。

ただ、その「ぶつかり合い」や「戸惑い」は決してデメリットではありませんでした。それまで「当たり前」だと思っていたことをもう一度捉え直したり、本園（野庭幼稚園＝のびのびのば園）が大事にしているものを、再度みんなで確認したりすることにつながり、結果的に、職員の中に、「より良い保育・教育とは?」「キリスト教に基づく保育とは?」「主体性とは?」等についての課題意識が、常に自分事として根付くようになりました。

【施設・設備の変遷】

認定こども園への移行に伴い、園の施設・設備も整備されました。

2012年のこども園の開設に合わせ、新棟を増築し、乳児保育室や調乳室、給食室（調理室）、ランチルーム、ミーティングルーム、更衣室、シャワー室、職員休憩室等を新たに設置しました。

それと同時に、自園調理の給食を開始し、保育園タイプの子ども（2号・3号児）だけでなく、幼稚園タイプの子ども（1号児）にも、毎日給食を提供するようになりました。ちなみに、給食の調理は、2019年度までは本園の職員で行っていましたが、2020年度からは、ハガクレフード（現ソシオフーズ）という外部の業者に委託して行っています。（自園で調理するスタイルは継続しており、変更ありません）

また、旧棟や駐車場、園庭も、少しずつ改築・増築や改修・改造を行いました。

2012年のこども園の開設時には、既存の幼児保育室の壁を取り外し、オープンな保育ができるようにしました。

2016年には、送迎専用の駐車場を改修し、ロータリーとして利用できるようになり、保護者が車から降りなくても、送迎できるシステムを始めました。

同時に、駐輪場から園内に入る門扉を、カードキーによる開錠システムにし、門扉から玄関へ向けての「徒歩送迎者用スロープ」を設置することで、安全な送迎ができるようにしました。

2017年と2020年には、「ひかり文庫」を増設・改修し、そのスペースを広げると共に、本をふんだんに使った部屋にし、子どもが自由に本を選び、好きな姿勢で本を読める部屋にしました。

2018年には、ホールを増築し、幼児保育室とホールの前に、雨除けと日除け対策のオーニングを設置しました。

2019年に、ホールにスタンドグラス風のピクチャーグラスを設置し、ホールでの礼拝や式典において、キリストの香りが、さらに香るようになりました。

2020年には、ランチルームを多目的室「にじの部屋」に改修しました。これは、コロナ感染症の蔓延によって食事の在り方が制限されたという面もありましたが、地域に開放する園、地域と共に歩む園という方向性をより明確にするための部屋として活用していきたいという思いが形になったものでした。

そして2023年に、のびのびのば園の保育理念と職員の思いを形にした新しい園庭が完成しました。

【園庭改造への取り組み】

幼稚園時代の園庭は、鉄棒や雲梯等の遊具はありましたが、運動できるスペースが広く確保されており、どちらかと言えば、サッカーをしたり、走り回ったりするのを楽しむ園庭でした。

こども園になったことをきっかけに、『遊び』を大切にするこの園の理念を体現する園庭』を求める職員の思いが、少しずつ園庭を変えていきました。

スタートは2015年です。「園庭を遊び場に変えていこう」との声が職員の中で上がり、園庭の隅に職員が土を耕してクローバーの種を撒いたことから始まりました。

その後、在園児のお父さんやお爺さんが集まって活動する「おやじい〜の会」で、園庭の中央に段々砂場を制作したり、職員が花壇やバタフライガーデンを設置したりしたことで、草花の種類や量も増え、徐々に園庭が変化してきました。それと共に、子ども達が砂や土に触れて泥まみれになったり、虫を見つけて、捕まえ、観察したり飼育したりする姿も増えていきました。

その間にも、大学教授や園庭研究をされている講師の先生を招き、遊びや園庭、自然についての学びを深めたり、他の園庭等を見学したりすることが続けられ、その中で、「子どもの遊びをより豊かにしたい」という職員の思いがより具体的になり、何度も何度も活発な意見が交わされ、少しずつ「設計図」として新しい園の形が見えるようになってきました。

そして、2023年1月に、子どもが五感を使って遊びこめる自然豊かな新しい園庭が完成しました。

新しい園庭は、中央に築山が二つ設けられ、一方の築山には砂場やガチャポンプが、もう一方の築山には園児が昇ったり飛び降りたりできる崖が備え付けられました。

園庭のあちこちに虫やトカゲなどが隠れる場所があり、蝶々が卵から成虫への成長が直に観察できるバタフライガーデン、ちぎってよい草や花、腕いで食べていい果実、こどもがチャレンジできる段々や崖・鉄棒・雲梯、こどもの創造や工夫ができるガチャポンプや砂場、そして、小さいながらもサッカーができるオープンスペース等、子どもたちの遊びが広がる空間ができました。

「自然を感じながら、体を動かし、心を開放することのできる園庭」「子どものチャレンジする意欲や探求する思いを満たす要素をちりばめた園庭」「異年齢を含めた、他との関りを実現する園庭」。

職員の「思い」が「形」となったのです。

【ICT 化の効果】

本園が取り組んできた園内の ICT 化は、目には見えにくいのですが、保育を行う上での大きな支えとなり、またのびのびのば園の魅力や理念を発信するツールとして充実・進化してきました。

大きな変化としては、2019年度に「CoDMON（コードモン）」というシステムツールを導入し、翌年に、タブレットを保育室で活用できるように購入しました。

そのシステムでは、保護者が IC カードを使って登園・降園をチェックすることで、出欠の管理や登降園の時間の記録が自動的に行える他、職員への業務連絡や緊急性のある情報共有、保護者への配信（全体にも個別にも）、保護者からの連絡（出欠の予定連絡、急な欠席・遅刻・早退の連絡、子どもの体調その他の連絡、登園前の検温結果、個人的な相談事など）、また行事や懇談会等への出欠希望のアンケートの集計機能などがあり、事務の効率化が図れています。

2023年度からは、連絡帳の機能や週便りの定型化の試行も始め、活用の幅を広げつつあります。

また2021年度には、園内の防犯カメラをリニューアルし、子どものケガや事故・トラブル等の確認作業、保育内容の検証または説明に活用できました。何よりも、コロナまん延時に園内で陽性者が出た時に、園内での濃厚接触者の特定が求められたので、子どもの行動を検証し、園がより適切な対応を行うのに役立ちました。

さらに、特筆すべきことはこの5年間でホームページが進化・充実してきたことです。

リアルタイムでの保育内容の配信、園の取り組みの PR、園からのお知らせなど様々なコンテンツを設定し、本園の魅力を内外に発信するとともに、園の知名度あげ、のびのびのば園としてのブランドの確立に大きく寄与しました。

それは、転居のために港南区で園を探している方を始め、多くの方が「ホームページを見て、この園に入園したいと思いました」とおっしゃっていたことに表れています。

【地域との連携への取り組み】

～無印良品との出会い～

2021年3月に野庭地域の再生・活性化についての検討をするために発足した「野庭住宅と野庭団地の未来を考える会（その後2022年4月に『野庭住宅・野庭団地の未来につなぐ会』に名称変更）」に、地域連携の視点から、野庭の地域にあるこども園として、その準備段階から参画しました。

その取り組みの中で、行政や地域の自治会・商店の方々、また小学校や地域ケアプラザ等の施設の方々、さらには「無印良品（正式な社名は『株式会社 良品計画』）」と出会い、繋がりが深まり、地域の活性化だけでなく、様々な場面で協力・協業するようになりました。

特に、「無印良品」は、その企業理念の中に「各地域のコミュニティセンターとしての役割を持ち、地域の皆さまと課題や価値観を共有し、共に地域課題に取り組む、地域への良いインパクトを実現する」という言葉がある通りに、企業の視点から野庭地域の再生に取り組んでいこうとする姿勢があり、その姿勢が本園の地域連携への想いと共鳴して、数々の取り組みにタッグを組んでチャレンジしました。

「親子でエコバックに絵を描くイベントを通して SDGs の意識を育て、地域を元気にする取り組み」「親子で作る簡単レシピの作成」「園内に保護者が交流できるカフェ設置の試行」「本園の行事での無印良品の来店」「無印良品の店舗や地域の施設での子育て支援イベントの実施」等です。

このような活動ができたのは、2017年度に園の保育教諭の中から「地域連携担当」を専任で置いたことが大きなきっかけです。

担当者が、地域の様々な施設や団体、個人と「顔と顔の見える関係」を構築していく中で、無印良品の担当者との関係が深くなり、「野庭の地域を元気にするにはどうすればいいのか？」ということをも本園と無印良品の担当者が一緒に考え、研修し、実際に実行する機会を作っていました。

【子育て支援への取り組み】

実は、「地域の子育て支援」という視点は、幼稚園時代からもあり、2009年にはすでに、幼稚園での「預かり保育」も行っており、「ぶどうの木」や「こひつじ広場」という地域の未就園児対象のプログラムも行っていました。

その土台の上に、認定こども園になってからの 10 年は、こども園の3つの機能の一つである「子育て支援」を意識して、より鮮明に力を入れるようになり、「ぶどうの木」を継続するだけでなく、2017年には未就園児のための「ころりんひろば（後にころりんくらす）」を立ち上げ、地域の子育てママの応援を始めました。また、学齢児の居場所としての「のびのびの場」を開催し、充実させることを目指しました。

「ころりん」では、関東学院大学教育学部の土谷教授（当時）にもお力をお借りし、親子の居場所ということだけではなく、子育て相談の場としても、その機

能を発揮しました。

しかし、スタートからしばらくは「ころりん」のスタッフに本園の専任職員が入っていなかったこともあり、「園全体の取り組みとして行こう」という機運はあまり見られませんでした。

そのような中、2020年3月からの新型コロナウイルス感染症のまん延により、様々な活動が制限され、2年間は「ころりん」を始めとして「ぶどうの木」「のびのびの場」など、在園児以外を対象とした、地域の子育て支援の活動も大きく制限されてしまいました。

苦肉の策として、動画配信を中心に、インターネットを活用した子育て支援活動を継続し、それなりの成果はあったのですが、子どもや保護者と直接に触れ合うことのできないもどかしさがありました。

コロナ感染症が落ち着きを見せ始めた2021年度から地域の子育て支援を少しずつ再開し、対象を2歳児に限定した「ころりんくらす」が再スタートしました。

再スタートに当たって、子育て支援の中身も大きく進化・発展しました。それは、まず「ころりん」担当者（リーダー）が専任職員となり、在園児への保育と一体化した支援ができるようになったこと、またこの時期に「地域連携」の取り組みが始まり、それに呼応する形で、園の外に出ての子育て支援も行うようになったことなど、のびのびのば園の子育て支援に新しい風が吹き込まれました。

具体的には、3代目の園長である井上園長の時期に、地域の小規模園との連携や子育て支援事業所との連携をスタートし、また、本園の子育て支援担当職員が地域ケアプラザ主催の子育て支援事業「出張子育て支援」に出向いたり、地域連携担当職員が市立保育園のネットワーク担当や育児支援担当と連携を取りながら、区や他事業所・施設の子育て支援活動に参画したりするようになりました。

それらの取り組みを経て、2023年に「地域連携」と「子育て支援」とを統合した形でのイベントが、野庭団地のショッピングセンター内のスペースをお借りして行った「えんにちあそび」です。

このイベントでは、スタッフにイベントを主催した本園の職員と無印良品の担当者だけでなく、野庭団地の自治会やショッピングセンターの役員の方、住宅供給公社の職員、民生委員、主任児童委員、青少年指導員、地域ケアプラザの職員、卒園生の保護者と、地域の様々な方々のお力をお借りして行い、100人を超す親子に喜んでもらいました。

【大事にしてきたこと】

一方、「変化してない」と言うよりも、敢えて変え

ずに大事にしてきたものがあります。

園の理念に示される「キリストの愛に基づく保育」と、育ちの環境を大切に「遊びの中から子どもの主体性を引き出す保育」です。

この二つについては、職員一人ひとりが、毎日の保育の中で大切に、また常にその本質を問いかけながら、より良い姿を目指す営みを続けてきました。

*キリストの愛に基づく保育

キリストの愛に基づく保育は、当然のことながら、この園が幼稚園であった頃から脈々と行われてきたのですが、こども園になるタイミングで、そのことを内外に分かりやすく伝えるため、いわゆるキャッチコピーとして「一人ひとりとは特別です」という言葉を使うようになりました。この言葉は、「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」（ヨハネによる福音書15章12節）という聖書の言葉に基づき、どの子どもも神様から愛されている特別な存在であり、保育者は、子ども一人ひとりの命と個性、想いを大切に保育をするという決意が込められています。

そして、こども園3代目園長の井上園長の時には、それに加えて「夢と希望と愛に満ちたこども園」を、目指す園の姿として示しました。

子どもも保育者も保護者もお互いに愛し合い、大切にしよう園。子どもの「やりたい」という気持ちを育て、かなえてあげられる園。子どもが安心して安全に過ごせる園。子どもが自分の願いを創り出すこと（やりたいことややりたい自分に向かって頑張ること）のできる園。子どもが他の人と共に生きる喜びを全身で感じることでできる園。そのようなこども園をみんなで作っていこう。そして何よりも、そのような園の姿は、神様からの大きな愛に支えられているからこそ実現できるのであるということを、私たち園の職員一人ひとりがしっかりと受け止めながら、子ども達に向き合っていこうという想いの表れた言葉だと思います。

*遊びの中から主体性を引き出すこと

子どもが興味の持ったことを好きなだけ遊びこむことを保証し、その遊びを通して子どもの主体性を引き出す保育は、この園のゆるぎない柱です。

その柱を、園の保育目標として「やってみよう」「大切にしよう」「表現しよう」という三つの言葉にして掲げています。

この保育目標には、私たち園の職員の役割として、「子どもが、生活の中の様々な事象や環境に興味を持ち、自分でやってみようとする主体的な気持ちを育てること」また「活動の中で、自分や相手の気持ちや考えを大切に、お互いの違いを認め合い、思いやる心

を育てること」そして、「考えながら工夫して学びを深め、表現する楽しさを知り、他との関わりを広げるのをサポートすること」であるということを示しています。

これは、見方を変えると子どもの「非認知能力」を育てるということでもあります。この「非認知能力」という視点は、保育・教育業界において、ここ数年注目されてきた視点であり、従来の知識や技能に偏った「能力」の捉えから、学ぶ意欲や学び方、また学んだことをどう活かすか、ひいては自分の生き方そのものをどのように創り出すかの「能力」を大事にする視点です。

平成29（2017）年に告示された最新の学習指導要領でも、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力の三つの柱の一つとして『学びに向かう力・人間性等』を掲げ、「主体的・対話的で深い学び」を実現するように示されており、また横浜市が2020年に策定した「よこはま☆保育・教育宣言」の中でも、「大切にしたい子どもの育ちと学び」の視点の一つに、「非認知能力」を置き、宣言1で「安心できる環境をつくり、一人ひとりを大切に保育します」とし、また宣言2で「子どもの育ちと学びを支える主体的な遊びを大切にします」としています。

のびのびのば園は、国や横浜市が示す前から「主体性」や「非認知能力」に視点を当てた保育、つまり「夢と希望と愛に満ちたこども園」で「遊びの中から子どもの主体性を引き出す」保育を実践してきたのです。

【今後、引き継いでいくこと】

1 キリストの愛に基づく保育の徹底

「キリストの愛」を、言葉や理念だけでなく、職員・子ども・保護者の一人ひとりが、日々の生活の中で具体的に実践する園を目指したいと思っています。そして、職員の姿や子どもの姿、園の姿勢を通して、地域の方々に「キリストの愛」を伝えられればと思います。そのためにも、職員・子どもの礼拝を大切に、同時に地域の教会とのつながりを深めていきたいと思っています。

2 理念の実現のため、対話と模索を続ける姿勢

職員一人ひとりが、「理想の保育や理想の園の形」を追い求めることを続けていきたいと思っています。理想を追う中では、「主体性とは何か？」「効率的な勤務体制とは？」等、簡単には答えが見つからない課題も多くありますが、一つひとつに真摯に向き合い、答えを出せない苦しさをみんなで共有しつつ、自由に話し合いながら、求め続ける姿勢を持ち続けたいと思いま

す。

そして、保育者一人ひとりが、保育そのものだけでなく、保護者や地域にも目を向け、園全体の運営にも参画する意識を持って、みんなで「理想の園」創っていきたいと思います。

3 子育て支援・地域連携のさらなる充実

今、国レベルで「保育所入所における保育要件を無くす」との議論がある中、保護者を支え、子どもの健全な成長を助け、守るには、保育施設が「子どもを預かって、保育・教育する」だけでなく、「保護者も一緒に子どもを育てる」「子育ては保護者にとっては喜びである」という当たり前のことを改めて発信することが大事だと思います。

地域の子育て世代の保護者への支援をもっともっと充実させること、そのための地域との関係を深めることを、のびのびのば園の使命としたいと思っています。

そのためにも、「無印良品」との出会いで得た、企業との連携の在り方のノウハウを大いに活用し、新たな連携先を開拓することも視野に入れていきたいと思っています。

4 のびのびのば園のブランドの確立

「キリストの愛に基づく保育」と「あそびの中から子どもの主体性を引き出す保育」は、のびのびのば園が誇る保育理念であり、これからの時代に求められる保育です。

しかし、のびのびのば園が誇るべきことは、保育理念や施設、環境、保育の内容だけでなく、保育者一人ひとりの生き方・人間性が結集した園の雰囲気そのものだと思います。それは、いわゆる「キリストの香り」がする園です。

私たちは、その誇り（香り）の上にたって、自信を持って、のびのびのば園の魅力を地域に発信していきます。それが、のびのびのば園のブランドとなっていくと思います。

また、子育て世代の支援のために、港南区の保育園や幼稚園・こども園が、力を合わせて取り組む仕組みを構築し、のびのびのば園がそれをリードする園となればいいかなと思っています。

野庭の地域や港南区の「子育て支援」の在り方が全市的・全国的に広がっていく。

その夢に向かう中で、地域の園としての実行力・発信力・牽引力を示すことでも、のびのびのば園のブランドを確立していければと思います。

地域に開かれたこども園として

関東学院のびのびのば園 副園長 平 幸子

【園庭改造のあゆみ】

・2012年

幼稚園から認定こども園としてスタートした当初、園庭は運動会や課外活動でのサッカーができるようにと、広いグランドスペースを残していました。子ども達の遊びも、三輪車に乗って走り回ったり、鬼ごっこをしたり等の遊びが主流でした。また0歳児からの受け入れを始めたのにもかかわらず、園庭で遊ぶのは幼児が中心で、乳児は近隣の公園に出かけていくことが毎日の保育となっていました。

その後、園庭を「遊びを中心とした場所」にしようと考え、関東学院大学工学部（現建築・環境学部）中津准教授のお力添えを頂きながら、1回目の園庭改修工事を実施しました。



・2015年

園庭改修工事を実施し、芝生を植えた築山を新設、子ども達が座って遊べる場所を考え、レンガを園庭周りに設置しました。築山は子ども達に大人気で、山の上を登ったり、駆け降りたりを楽しんでいました。築山の芝生が枯れないように、職員が毎日交代で水を撒いていたのを思い出します。

その後、乳児と幼児のスペースを分けて遊ぶ場所があった方が良くはないかという案が職員から出てきました。乳児がゆったりと遊べるスペースの周りに柵を置き、乳児用園庭を作りました。けれども、子ども達の姿を見ていると、小さいお友だちと遊びたい幼児の子ども達が乳児園庭に入り、お兄さんお姉さんと一緒に遊びたい乳児の子は柵を出て広いスペースで遊ぶ、という姿がありました。こども園という0歳から5歳までの子どもが共に生活し、過ごしている空間を無理に分けることはないのでは？との話し合いから乳児

園庭はとりやめることになりました。

もっと子ども達の目線にたった園庭にしていきたい！という職員の熱い思いが強くなっていきました。そして、園庭の隅を職員が耕しクローバーの種を撒いたことから自然を感じる園庭へと変化がみられてきました。



・2018年

職員の中の園庭プロジェクトリーダーが発起人となり、園庭改造が本格的にスタートしました。園庭のレンガを撤去し、子どもも虫も遊びたい園庭を目指してバタフライガーデンの設置、クローバーエリアの拡大をしました。

・2019年

おやじい〜の会（在園児のお父さん、お爺さんの会）の協力を得て段々砂場を設置しました。おかげで子ども達が水、砂、泥で喜々として遊ぶ姿が見られるようになりました。おやじい〜の会には植栽や植樹にも協力して頂き、園庭に緑が増えたことにより、青虫や蝶々がよく遊びに来るようになりました。青虫を見つけてさなぎから蝶々になるまでの育ちを子ども達が見守り、成長の姿を見ることもでき、同時に生き物の命の大切さを知ることができるようになりました。これは子ども達にとって、とても貴重な体験として心に残っていきました。

園庭の桜の木の下にはウッドデッキを新設し、子ども達がおままごとをしたり、好きな絵本を読んだりして過ごす場所として遊ぶ姿がみられるようになりました。ウッドデッキをステージのようにして楽しく歌っ

ている子ども達もいました。



・2020年

「虫たちも子ども達も一緒に過ごし遊べる園庭」・「遊びが続く園庭」・「自然を感じながら心も体も解放できる園庭」を目指し、園庭改造に向けて職員が話し合い、研修をしていくことになりました。管理職や園庭委員に任せるだけではなく、一人ひとりの職員が園庭改造を自分事として考えるという意識の変化が見られてきた時でした。

関東学院大学の土谷みち子教授（当時）を始め、他大学の教授や園庭の研究をされている講師の先生を招き、遊びや園庭について職員が熱心に学びました。様々な意見を出し合い、また積極的に他園にも見学に出かけて行き、園庭改造への参考にしていきました。

長い時間話し合いを積み重ね、子ども達が遊べる園庭へのイメージを膨らませていきました。

園庭にあった老朽化していたなかよしランドを撤去し、ハーブガーデンを新設、様々な種類のハーブを子ども達と一緒に植えました。

・2021年

コロナ感染の流行もある中でしたが、職員は新しい園庭への思いに夢を募らせながら話し合いを積み重ねていきました。そんな中、のびのびのば園の目指している園庭を共に考え、実現してくれそうな「こどもみらい」という会社と出会い、1年以上かけて園庭の勉強会を行っていきました。子ども達が遊ぶ姿を目指しながら率直な思いを語り合いました。

保護者の皆さんにも理解を得るため、あゆみ（園だより）で園庭改造についての思いを配信したり、わかば会（保護者の会）でお話をしたりして園の思いを伝え、理解を深めていきました。

・2022年

おやじい〜の会の活動も徐々に活発になり、園庭へミニひまわり、百日草、朝顔、マリーゴールドなどを

植えました。次々に花が咲き、子ども達はその花を摘んでは、おままごとの遊びに使ったり、髪の毛に飾ったり、大切に手に持ったりする姿が見られるようになりました。

イメージしていた新しい園庭が設計図として形になり、園庭改造工事が着工しました。工事の間は園庭で遊ぶことはできませんでしたが、子ども達は変化していく園庭を、興味津々で毎日眺めて期待に胸を膨らませている様子でした。

・2023年1月

子ども達も大人も、みんなが待ちに待った園庭が完成しました。

新しくなった園庭は、子ども達のやってみたい気持ち、主体性を高めていくしかけが沢山あります。五感を使って遊ぶことができます。ガチャポンプ（保護者会からの寄贈）、石垣、段々になっている場所等、大人が見ると危ないかなと手を出してしまいがちな箇所もあります。大人が手をかさずに子どもがチャレンジできるよう、登ったり、跳んだり、降りたりする遊びを見守っていくようにと職員で話しあいました。



子ども達の遊びの様子を見ていると「手伝って」「できない」という言葉はほとんど聞かれず、大人に手助けを求める姿はほぼ見られません。

自分のやりたい、やってみたいという意志で、主体的に遊び、自らチャレンジして試し、友だちと遊びを楽しむ力がついてきた姿があります。

旧園庭の時からあった雲梯、鉄棒は残したままでしたから、引き続き遊んでいる子どもも多くみられ、身体能力も高まっていきました。

大きな変化としては、トカゲやカナヘビが園庭によく遊びにくるようになりました。緑の葉っぱには幼虫が沢山ついて、さなぎから成虫、蝶々へと成長していく姿が観察でき、子ども達の楽しみとなりました。

「子ども達がチャレンジして、自ら遊びたいと思えるような園庭」「虫も子ども達も一緒に遊べる園庭」にしたい！という職員の思いが形になりました。

しかし、園庭改造はこれで終わりではありません。子ども達の興味、関心を日々観察し保育しながら、今後も話し合いながら、進化を続けて行こうと考えています。



【ランチルームから子育て支援の場へ】

・2012年

幼稚園から認定こども園として開園した当初、新棟を増設し、乳児保育室、給食室設備、ランチルームを新たに設置しました。

子ども園開園当初から、全員で栄養バランスのとれた温かい給食を共に食べたいという思いから、現在まで変わることなく、全園児に自園給食を提供しています。

また、調理している方の姿が見られるように、子ども達が給食を頂くということを大切に思えるようにという願いから、年中、年長の子供達がランチルームで給食を食べるようにしました。

スタート時は子ども達も職員も慣れずに戸惑うことも多かったのですが、子ども達の様子を見て職員が話し合いを積み重ねるうちに、年長のみがランチルームを活用することになりました。自分の食べられる量を自分で決めて配膳するという取り組みを行っていき、年長の子供達も徐々に慣れてランチルームで楽しく食事をするようになっていきました。

「年長になるとランチルームで給食を食べられるんだよね～」という声も子ども達から聞かれ、楽しみに

待つ様子がありました。



〈のびのびの場〉

・2018年～

ランチルームを利用して、地域の子供達、卒園した小学生向けに「のびのびの場」という集まりを企画しました。当園の栄養士、関東学院大学栄養学部細山田教授にもご協力を頂きながら、栄養学部の学生さんとも連携し、食事やおやつを手作りで提供して、子ども食堂をイメージしながら、憩いの場となっていきました。小学生の子供達が一緒に調理をしたり、制作をしたり、ゲームを楽しむ時間となっていきました。

園庭で焼き芋大会を行い小学生だけでなく、地域の方々も集う場へと広がっていきました。

・2019年

新型コロナウイルスが2020年1月国内に発生、広まり、食に対する状況も変化していきました。ランチルームで給食を食べるのは止めて、各保育室で給食を食べるようにしていくように変更されていきました。

小学生向けののびのびの場も当面の間は中止を余儀なくされました。

・2020年

年度が変わって、ランチルームを多目的室に改装し、給食提供はハガクレフード（現ソシオフーズ）への委託になりました。現在もすべての園児に給食提供を行っています。

〈こひつじひろば〉

認定こども園に移行した当初は、野庭幼稚園時代からの子育て支援の取り組みを継続して、毎週水曜日の午後、2歳の親子向けに「こひつじひろば」という活動を行っていました。専任職員が交代で担当し、親子

での遊び、制作やふれあい遊びや、身体を動かす遊びを楽しんでもらい、結果的に入園へ繋がるように園の保育内容をお伝えする場でもありました。

担当は専任職員が順番に担っていましたが、通常の保育を抜いたりすることが難しくなり、違う形での子育て支援活動を行うように変化していきました。

〈ぶどうの木〉

乳児の部屋の隣（通称ロバの部屋）で、子育て支援の活動を行いました。0歳以上の親子が集い、職員と懇談しながら、様々な遊びを楽しむという場でした。

担当は園の非常勤職員が担当し、地域の情報を共有しあいながら、地域の親子への支援活動を進めていきました。

2017年頃から園としては、3歳児クラスへの希望者が減少という課題に直面するようになってきていました。地域の保護者にもっとのびのびのば園の保育を知ってもらい、アピールしていく事が必要であり、地域との連携を深めることが課題であると考え、それを解決する方法として地域連携担当職員を配置し、子育て支援担当は在園児の保育と連携できる専任職員を配置することで、地域の子育て支援に、より力を注いでいきました。

そして、ころりんひろばを地域向けに始め、非常勤職員が担当しながら、親子で遊べる場を提供していきました。

〈ころりんくらすスタート〉

地域連携担当職員、保育教諭の専任職員が本園の子育て支援ころりんひろば（現ころりんくらす）の担当となり、園とのパイプ役を担う役割になっていきました。入園前に、園の様子や雰囲気を知ってもらうこと、又、専任職員が担当を担うことで、園とのパイプ役が確立されつつありました。関東学院大学の土谷みち子教授（当時）にアドバイザーとして参加して頂き、お母さんたちの懇談も開催し、育児の悩みを話せる場もできていきました。

ころりんひろばで集まる時には、自然とお母さん達の輪ができて親しくなれるという場に広がりを見せていきました。



コロナ禍の間はころりんひろばのメンバーで集まることは難しくなりましたが、担当職員が工夫して、YouTubeでお家遊びのアイデアや、園の様子を紹介しました。保育者の姿が画面越しで見られるのは子ども達にとってはとても嬉しい時間のようなものでした。保護者にも大変好評でした。



感染も徐々に落ち着き、園で行う「ころりんくらす」と名称変更し定着してきました。

火曜日、木曜日と2つのグループに分けて親子で参加し、園の雰囲気にも慣れていくような活動も取り入れていきました。誕生会や人形劇、移動動物園等に参加して頂き、園の雰囲気を知って頂いています。

ころりんくらすだけの特別な夏のえんに遊びやクリスマス会も行っていますが、家族そろっての参加が多くみられ、楽しい時間を過ごすことができるようになりました。

関東学院大学の福田真奈准教授と教育学部の学生さんにも参加して頂き、保護者への学びの時間も設けることができています。

何よりも良かったことは専任職員が担当し、園の様子を伝える機会が増えたということです。3歳児からの1号（幼稚園タイプ）の入園も増えていきました。

担当の職員以外にも地域活動や子育て支援の活動につ

いて目を向けていくようになりました。



3歳児に入園した時に、顔見知りの先生がいるという事は、子どもの安心感に繋がります。また、保護者にとってもころりんくらすで過ごしている時から園の保育の様子を目で見たり、聞いたりしながら、心配な事を聞くことができる関係というのは、入園に際しての安心材料になっていると感じています。

2歳児のプレ保育（ころりんくらす）が今後も継続していき、野庭に住む親子に開かれた場所として展開できていければと考えています。

のびのびのば園が、地域にとって安心して子どもを通わせる場であり、保護者も気軽に子育て相談のできる場、保護者が気軽に集えるこども園として、職員一同力を合わせていきたいと願っています。

新たな目標は、保護者と子ども達で集える憩いの場「子育てカフェ」の計画を考えていく予定です。



幼稚園からこども園へ

関東学院のびのびのば園 主任 浦尻 友紀

関東学院のびのびのば園は、認定こども園として10周年を迎えました。「関東学院野庭幼稚園」から認定こども園「関東学院のびのびのば園」となってスタートした2012年、何もかもが変化し、大きな不安と戸惑いがあった毎日であったことを思い出します。

当時は、時代とともに保育園の需要が高まり、幼稚園としてだけでは園児獲得が難しくなりました。長時間保育が必要とされ、開園している時間が7時から20時までの13時間の保育となりました。それまでの幼稚園ではなかったお昼寝やおやつ、夕食の提供まで…。職員よりも長い時間、園に滞在している子どもがいることに、戸惑いはかくせませんでした。そして、土曜日も保育あり、年末年始以外は開園、職員の勤務体制もシフト制になり、働く環境の急激な変化に職員の疲弊も大きかったと思います。

このシフト制勤務により、何がつらかったかと言うと、職員間で話す時間が減り、子どもたちのことを共有したり、保育のことを話し合う時間を作り出したりすることが難しくなったことです。翌日の準備もままならない、その日の保育に精一杯でした。

当然すれ違うことも多くなり、このすれ違いの中で、どうやって時間を作っていくかが大きな課題でした。日々、そのような状況で、何を大事にして保育すべきなのか悩み、また、私たちの目指す保育ができるのだろうか…不安が大きかったことを覚えています。しかし、目の前にいる子どもたちに、丁寧に向き合い、心を込めて保育していこう、と職員で力を合わせてきました。現在はシフト体制の中で、業務を分担し、時間をうまく使う工夫をして、なんとかこども園としての体制が作られてきたような気がします。

キリスト教保育

こども園になっても、幼稚園時代から引き継がれてきた保育・教育は何ら変わることはありません。キリ

スト教保育を基盤とした、神さまから愛される子どもとして一人ひとりを大切にする保育は今も変わらず行われています。

自分のことも、周りの友だちのこともありのままを認め合う中で、自分らしく輝いてほしい、その願いは変わらず持ち続けています。

遊びを中心とした保育

遊びを通しての主体的な学びを大切にする保育、子どもを中心とした保育は、こども園になっても変わらないのびのびのば園の魅力であると言えます。

子どもたちが自ら自分の興味のあることを見つけ、遊びからの実体験を大事にし、主体的に楽しむ、そこには保育目標として掲げてきた3つの柱「やってみよう」「表現しよう」「大切にしよう」があります。

この子どもを中心とした保育を行っていくために、今現在も職員間での研修を行い、学びを深めているところです。そこで話題となっているのが、「主体性」と言うキーワードです。主体性とはどういうことなのか、子どもが自由にやりたいことだけをやることなのか、自分で遊びを選び、意欲的に取り組むことなのか、集団の中で、どのように自分を出していくのか…。

これだ！という答えはすぐには出ません。でも、私たちが常に心に留め、考え、話し合い、問いただしていくべきことだと思っています。子どもたちが自分の好きなことにとことん夢中になれる環境を作っていくために、保育室の環境設定の仕方を工夫するとともに、園庭の環境にも目を向け、園庭の改造計画へとなりました。



園庭での遊び

子どもたちにとっての環境を考えたときに、遊びの中心ともなる園庭をリニューアルすることになりました。時間をかけて職員間で話し合いを進め、何年もかけてやっと完成しました。

新しくなった園庭では子どもたちがさらに生き生きと遊ぶ姿が見られます。



体をたくさん使って遊び、時にちょっとチャレンジできるように、また草花や虫ともたくさん触れ合える

ように、そんな願いを込めて作った園庭です。

のびのびのば園の園庭は、ここで完成というわけではなく、これから子どもたちの様子から、さらに変化を続けることでしょう。



異年齢保育

1歳児から5歳児までの子どもたちが在籍しているのは認定こども園ならではのです。普段からクラスの枠を超えて過ごしている子どもたちですが、乳児と幼児の交流も頻繁にあり、ごく自然に混ざり合って過ごしています。

大きい子は小さい子のお世話をしたり、手を引いて歩いてあげたり、時に着替えを手伝ったり… 子どもなりに何かの役に立つ喜びを感じています。また小さな子はお兄さんお姉さんと遊ぶ中、真似してみたり、手伝ってもらったりするうちに、憧れの気持ちを持ちます。

のびのびのば園では、こうした交流が自然にでき、お互いに刺激を受け合って成長できることが良さであり、魅力であると感じています。

ひかり文庫

私たちが幼稚園開設時から大切にしてきたことの一つに「絵本」があります。

ひかり文庫という絵本のお部屋は、たくさんの絵本に囲まれたホッとできる空間です。

2020年にお部屋をリニューアルして床を畳にして、子ども達が本を選びやすいように、本の表紙が見える

収納棚を壁一面に取り付けました。

絵本の貸し出しは保護者の方々の協力を得て、ずっと続いていますし、おうちの人と一緒に記録するばかり文庫ノートも幼児期の大切な宝物になると信じて、現在も続けていることです。

動画やゲームの楽しさが増している現代ですが、それでも、園や家庭でたくさんの絵本に出会い、大好きな人と一緒にページをめくり読んでもらうことの大切さは、これからも伝え続けていきたいと思います。



コロナ禍

一方2020年には、コロナ禍に突入しました。新型コロナウイルスという未知のウィルスが私たちを不安の中に巻き込みました。

学校が休校になり、こども園の保護者の方にも休園への協力をお願いすることにまでなりました。

子ども達との関わり方も、密を避けなければならず、マスクでお互いの表情が見えない中、どのように保育したらよいのか、どのように気持ちを汲み取っていけばよいのか、悩みはますます増えました。子どもを笑顔で迎え入れ、何よりスキンシップを取りたい幼児期に、保育の現場では避けて通れない課題が山積みとなりました。保護者の方は保育室に入ることでもできず、会話も最低限、必要なコミュニケーションをとることも難しい毎日でした。

1号認定児にはお休みの協力をお願いし、保育の必要な子ども限定で、少人数での保育となりました。園に来ることができない子ども達とは、しばらく会うこともできませんでした。

何かできないことがないか考えた結果、歌や絵本、制作などの日頃保育でしてきたことを動画配信にて届けることを試みました。これは今までにない新しい発想でしたが、子ども達、保護者の方々にも喜んでもらえることができ、離れたところでもつながっていられるという手ごたえを感じることができました。

また、様々な行事が中止となり、できたとしても参加人数を制限することとなったため、懇談会をZoomで行ったり、卒園式のライブ配信をしたり、インターネットが進んだ今だからこそ実現できたこともありました。

できないことが多かった日々でしたが、その中で「できることは何か?」「つながりを持続けるためには何ができるか?」皆でよく考えた時期でもありました。

コロナによって多くの制限されることがありましたが、一方では、今まで当たり前だと思っていた行事への取り組み方等も原点に戻って考え直すこともでき、苦労が多い中ではありましたが、今となってはデメリットではなかったように思います。

地域との連携

のびのびのば園は、園内だけにとどまらず、地域に向けても発信力が増してきました。ホームページの充実やブログ発信など、園外へアピールができるようになりました。

また、園職員の中に地域担当者を作り、のびのびのば園と地域とのつながりを持てるようになりました。未就園児に限らず、卒園生や地域の小学生が園に集う機会も増やしていきました。こうした園の取り組みは、久しぶりに園に足を運ぶ機会にもなり、再会を喜び合える時でもありました。

しかし、こうした取り組みも、コロナ禍に入りしばらくできなくなってしまいました。人と出会うことができず、親子とも友だちとも関わるができなため、孤独や寂しさ、そして不安を感じる親子が多かったことでしょう。地域の子育て支援としての重要性を強く感じた時期でもありました。

最近ではこうした地域の方々に向けたイベントを再開させ、集ってくれる親子の笑顔が見られるようになりました。のびのびのば園がこの野庭の地域にあるということは、在園児のみならず、地域に開かれ、地域に愛された園を作っていく必要があるのだと強く感じることができます。

卒園生との再会

この園を卒園した子どもたちが、大きくなって再び園を訪れてくれることもあり、これは大変うれしいことです。

小学校卒業、中学校卒業の節目で園に来てくれると、その成長ぶりには驚きとともに、感動を覚えます。さらに、卒園生が保護者となって、お子さんを連れてきてくれることもあります。

数年前、私が新任で受け持ったお子さんが結婚の報告に園に来てくれたことがありました。なんとお相手も、共に園生活を過ごした同級生、私もよく知っていたお二人でした。話を聞くと、幼稚園時代に自分がこの園で過ごし遊んだこと、楽しかった毎日がよみがえってくるとのこと。今も行われているお泊り会、クリスマスなどの行事も思い出の一つである中、それ以上に、園庭でどろんこになって遊んだことや、好きな工作を思い切り楽しんだこと、といった日常の遊びが、心ゆくまでできたことが何よりもよい経験になっていると聞いた時、私たちの保育は間違っていなかったんだ、と再確認することができました。そして、お二人は我が子にも現在ののびのびのば園での園生活をさせたいと、お子さんの入園を考えてくれています。これは幼稚園からこども園へと変わっても、のびのびのば園が大切に考え行ってきた保育が変わりなく受け継がれていることの証明ではないかと考え、私にとっても大きな励みになりました。



これからも、野庭幼稚園の時代から築き、大切にしてきたことを忘れず、そこに新しい取り組みをプラスして、さらに良い保育ができるように、そして園児も保護者も職員も、皆の笑顔あふれるのびのびのば園でありたいと強く思います。



のびのびのば園10年の歩み

年度	歩み	備考
1976年 (昭和51年)	○「のびのびのば園」の前身である「関東学院野庭幼稚園」を横浜市港南区野庭町に開園する。 ○幼稚園初代園長に下平千太郎就任。	
2012年 (平成24年)	○保育園機能を追加し、認定こども園として改めて開園する。 ○名称を「関東学院のびのびのば園」とする。 ○こども園初代園長に松田和憲就任。 ・新棟を増築し、乳児保育室、給食設備等を新たに設置。 ・自園調理の給食を、毎日提供することを始める。	
2014年 (平成26年)	○こども園2代目園長に河合輝一郎就任。	関東学院創立130周年
2015年 (平成27年)	○子ども・子育て支援新制度開始に伴い、「認定こども園」から「幼保連携型認定こども園」に移行する。 ・園庭改修工事を実施し、築山を新設する。	
2016年 (平成28年)	○こども園3代目園長に井上恵子就任。 ・送迎専用駐車場を改修し、ロータリー方式での送迎を行えるようにする。 ・徒歩送迎用スロープを新設。 ・駐輪場から園内への門扉をカードキーによる、開錠システムにする。	
2017年 (平成29年)	○こども園創立5周年 ・こども園満5周年記念感謝デー（バザー他）を開催。 ・ひかり文庫の改修（スペース増設）。 ・「おやじい〜の会」発足。 ・1・2歳児親子対象の「ころりんひろば」開始。	新学習指導要領告示
2018年 (平成30年)	・ホールを拡張する。 ・園庭改修工事を実施。クローバーエリアが拡大する。 ・幼児保育室およびホールの前に、雨除けと日除けの対策としてのオーニングを設置する。	
2019年 (平成31年)	・ICT ソフト「CoDMON（コドモン）」を導入する。 ・ホールにステンドグラス風ピクチャーガラスを設置する。	世界で初めて新型コロナウイルスが確認される
2020年 (令和2年)	○小規模保育園との連携を、7法人10園と締結する。 ・新型コロナウイルス感染症のまん延のため、入園式が6月になるなど、感染症対策のために通常の保育が制限される。 ・各保育室に iPad を導入し、園内情報の共有化を推進する。 ・給食をハガクレフード（現ソシオフーズ）に委託する。（自園調理は継続） ・「ひかり文庫」をリニューアル（木材と畳の室内）。 ・ランチルームを多目的室「にじの部屋」に改修する。	新型コロナウイルス感染症が国内に発生する
2021年 (令和3年)	○こども園4代目園長に仲程剛就任。 ・野庭地域再生計画（後に「野庭住宅と野庭団地の未来につなぐ会」に移行）に地域のこども園として参画。無印良品との連携が始まる。 ・2歳児ブレ保育として、対面での「ころりんくらす」が再スタートする。	新型コロナウイルス感染症のまん延により、社会生活の様々な場面での規制が続く
2022年 (令和4年)	○こども園創立10周年 ・こども園10周年記念礼拝・式典を挙げる。 ・園の保育理念と保育者の想いを体現した新しい園庭への改造工事が行われる。 ・10周年記念サイトの開設など、ホームページが充実する。	
2023年 (令和5年)	○新しい園庭が完成し、園庭での保育を再開する。 ・地域と連携した子育て支援イベント「えんにちあそび」を開催する。	

中学関東学院本校舎から学ぶ大正関東地震

関東学院大学 建築・環境学部 教授 渡部 洋

1. はじめに

私立中学関東学院は、1919年1月27日に横浜の地（横濱市南太田町字霞耕地）に設立、創立されました。現在の関東学院中学校本校舎は139°37.2′E, 35°26.5′Nに位置し、今から100年前の1923年9月1日午前11時58分32秒に発生した大正関東地震の震源139°8.1′E, 35°19.8′Nからの距離は45.7kmです（図1、2参照）^{1), 2)}。

当時の中学関東学院本校舎は、鉄筋コンクリート（以下 RC と略記）造により、1919年、1920年と段階的に建てられましたが、大正関東地震により、本校舎は広範囲にわたって被災し、同年10月15日から捜真女学校に校舎を間借りして授業が再開されました。

一方、全国に60箇所余あったとされる地震動を観測できる測候所のうち、大正関東地震における地震動の記録は、震源より168km～216kmとやや遠隔地の水戸測候所や岐阜測候所の記録が残されていますが、震源に近いものの計測は針が振り切れ、あまり残っていません³⁾。その意味では、当時の関東地震が横浜でどの程度の地震動であったかについては、わかっていないことも少なくありません。

当時、中学関東学院本校舎に設置された地震計はなく、屋根が消失し崩壊しましたが、一部の棟は、地震

に耐え、地震後もその姿を留めました。このことから、大正関東地震は本校舎を破壊する地震動であったのに対し、同校地の一部の棟を破壊するには至らない規模の地震動であったことが推測されます。

本研究では、現行の建築物の耐震計算ルートの元にもなった、既往の壁率と被害率の研究⁴⁾を参照し、関東地震の当該地域における地震動の大きさについて検討することといたしました。

持続可能な社会を実現するには防災の観点は重要であり、139年の歴史を重ねてきた関東学院における震災の経験を振り返り学び、近く地域に発生するかもしれない地震と建築物の被害の関わりを考え、備える上での一助とすることを目指します。

本報告は、2023年9月17日、18日に横浜国立大学を会場として開かれた第8回防災推進国民大会における関東学院大学建築・環境学部建築エンジニアリングコースの一員としてのポスター発表資料⁵⁾に、新たにトイレ棟の図面詳細、後述の志賀マップとの対応を加え、考察したものです。

2. 中学関東学院本校舎等図面の復元

1919年当時の中学関東学院本校舎の設計者は、Bernard Michael Word です。Bernard Michael Word

表1 中学関東学院創立10年までの主な出来事

1919	1月27日	私立中学関東学院創立
1922	4月4日	高等学校、専門学校入学資格の指定を受ける
	4月10日	徴兵令、普通文官任用令によって指定され中学校と同等の資格を得る
1923	9月1日	授業開始前、関東地震 M7.9によりほぼ全施設を失う 震災前在籍生徒数546名
	10月1日	午前10時 関東地震後はじめての出席 生徒3名死亡、生死不明30名 教職員3名死亡 （『基督教教育同盟震災被害一覧表』より）
	10月4日	理事による視察
	10月15日	捜真女学校にて授業を行う
1924	1月15日	丹沢地震 M7.3（最大規模余震）仮校舎1/3が倒壊
	2月29日	仮校舎建設後三春台で授業再開
1929	4月	関東学院中学部本校舎鉄筋コンクリート造1棟が竣工
	11月4日	創立10周年記念式典を挙行

参考：2021年8月 学院史資料室事務室ミニ資料展

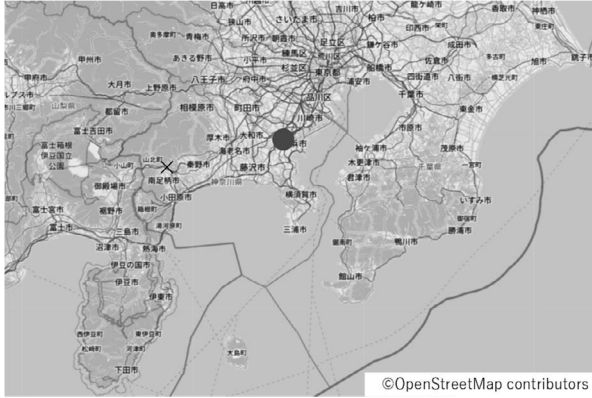


図1 対象建築物●と大正関東地震震央×

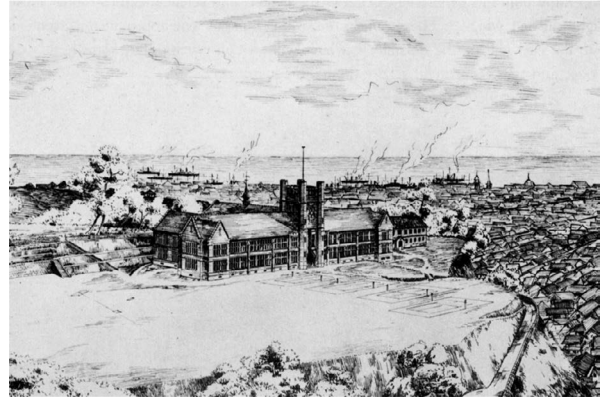


図3 中学関東学院本校舎完成予想図（南西側）

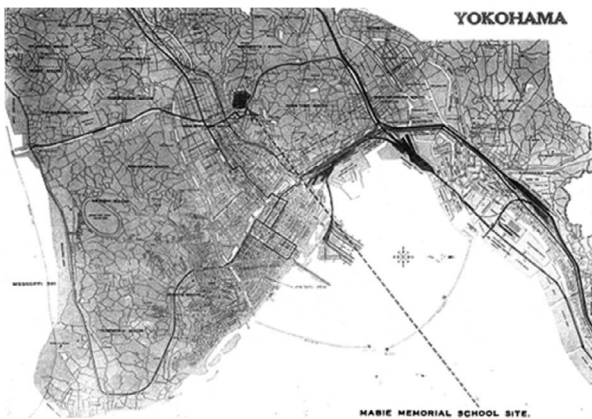


Fig.2 In the heart of a city of a half million.

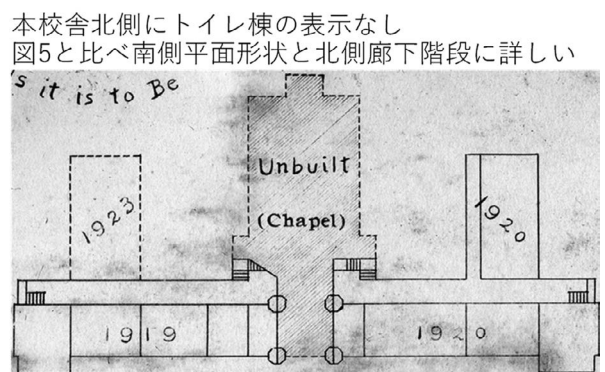


図4 見取り図 A

は、1921年に竣工し横浜市中区に現存する旧露亜銀行の設計者でもあります。中学関東学院本校舎と旧露亜銀行の構造はともに RC 造であり、中学関東学院本校舎は、関東地震により大破したのに対し、旧露亜銀行は関東地震に耐え、2011年に改修が施されました。

1919年当時の中学関東学院本校舎の図面は、現存せず、復元の手がかりは、当時の見取り図と写真です。見取り図には2種類のものがあり、ひとつは図4、もうひとつは図5の1921年6月にアメリカバプテストミッションが発行した募金宣伝用のパンフレット International cooperation at the gateway of the orient に示されたものです。これらの見取り図と、説明文と写真を手掛かりとして、本館平面図の復元を試みました。

ここで、大正関東地震当時、校地に建っていた建物のうち本校舎北側のトイレ棟については、大正関東地震後にも残り、Jay H. Morgan により設計された後の雨天体操場の図面に示されており、トイレ棟の寸法の詳細を把握できました。

図6、7、8に、竣工後から大正関東地震の間の期間に撮影された本校舎外観を示します。図9に、図4～図8を踏まえて復元した平面図を示します。

各教室の開口が表現されている
本校舎北側にトイレ棟の表示あり

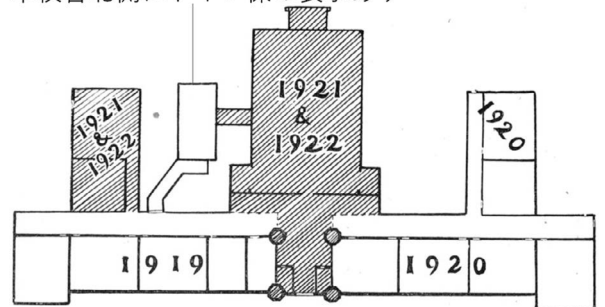


図5 見取り図 B/Rough Outline of Ground Plan



図6 中学関東学院本校舎外観（普門院から南東側）

右の配置図は、文献8より引用している
図4のChapelは建設されていない
図5の斜線部は建設されていない
東棟の東端は3階建てに見える
→東西方向傾斜、東棟地下階有

西棟南面に近接しテニスコート2面が見える
∴テニスコート短辺×2面×西棟長辺長さ
10.97m×2+3.66×4=36.6m後述の長さとはほぼ対応



図7 中学関東学院本校舎外観（南西側）

西棟北側に平屋建てのトイレ棟がある
図5の斜線部は建設されていない
地上階では東棟と西棟は一体化されていない



図8 中学関東学院本校舎外観（北西側）

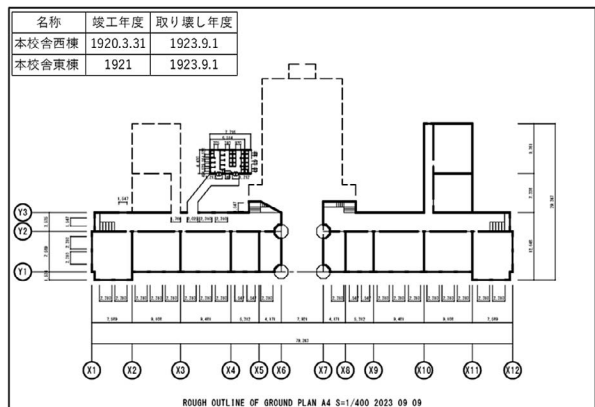


図9 復元平面図

3. 構造体の推定

屋根：スレートが使われました。スレートは建築材料の一種です。本来粘板岩の薄板からなる天然スレートがあります。一般にセメントに砂、石粉、石綿などを混合して練り、圧搾成形したものをスレートといいます。一定の耐火性、耐水性を持つ反面、強度は一般に低いと考えられます。1m²あたり20kg程度の質量と仮定されます。

壁：「本校舎の主構造はRC造」との記述を元に厚さ150mmとして仮定します。

建物寸法：International Cooperation at the gateway of the orient, An educational challenge from Japan, page 5の「本校舎南間口260ft」との記述を元に、長辺方向長さを79.2mとしました。これは、図7の本校舎西棟南側に位置し並んだテニスコート2面との大きさの対比からも妥当な数値と判断できます。

建物重量：RC造建築物の単位床面積1m²あたりの質量を1tとして仮定します。

4. 大正関東地震直後

被災した本校舎の現地視察が、1923年10月4日に行われました（図10～13参照）。図10～13と図14は大正関東地震後の写真ですが、図10と比べ図14では本校舎西棟の損傷がより顕著になっています。1923年9月1日の本震の後、いくつもの余震とみられる地震が生じたことが報告されており、図14は10月4日より後に撮影され、余震により建物の被害が進行したものと考えられます。

図12より、倒れた壁や柱の基部に、縦方向の鉄筋の痕跡は認められず、配筋が一部不足していたことが推測できます。

本校舎は東棟において被害が顕著です。これは、西棟は2階建て、東棟は構造としては3階建てであり、西棟に比して東棟の建物重量が大きいこと、東棟の形状不整形にて平面的なねじれ振動を伴う形状であったこと、東棟の支持地盤が傾斜しており、これに対しRC造の基礎梁を含む基礎の剛性が不足したことの影響が考えられます。東棟南側のRC造柱にはせん断破壊が認められます。また、図11に示されるように、柱のみが残り、柱頭に横に架けられた梁が抜け出し破壊した箇所も見受けられます。これは、設計者による旧露亜銀行にも採用された、今日でいう鉄筋の機械式定着に相当する鉄筋に相当するカーンバー、カーン式異形鉄筋と呼ばれる羽根つき形状の鉄筋が梁端に使われましたが、柱と梁の境界端にて梁の定着破壊と呼ばれる破壊を生じたと推測されます。

本校舎西棟において、見取り図における北側の増築予定箇所の被害が顕著です。これは、増築を予定していたが故に、既存平面北側において壁量などが他に比して不足したことが影響したと考えられます。

本校舎の屋根は失われています。これは、屋根はRC造ではなく、スレートにより造られ、消失した可能性があると考えられます。

図14において、本校舎は大きな被害を生じる一方、本校舎北側のトイレ棟は、健全な状態で建っているように見受けられます。

本校舎、トイレ棟、それぞれの平面詳細がわかれ

ば、当該敷地に生じた地震動の程度が類推できそうです。

1923年10月4日に撮影されたものと思われる。



図10 地震直後の中学関東学院本校舎被害（北西側）

1923年10月4日に撮影されたものと思われる。

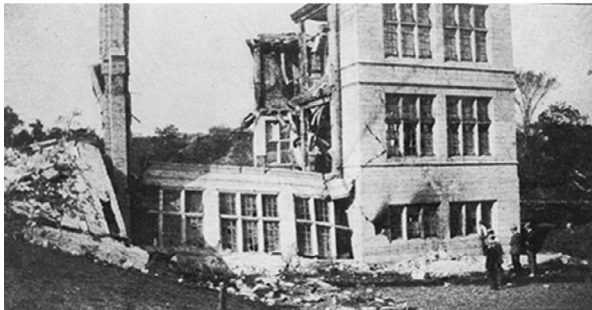


図11 地震直後の本校舎東棟の被害（南側）

1923年10月4日に撮影されたものと思われる。



図12 地震直後の本校舎東棟の被害（南側）



図13 1923年10月4日被害状況視察
C.B. テンネー、渡部元、坂田祐、高橋楯雄、J.F. グレセット、
R.H. フィッシャー



図14 本校舎被害（南西側）

5. 建物特性と地震動

建物特性について、以下の通り仮定します。

□本校舎東棟：地下階の形状に不明な点が多く検討対象から除外します。

■本校舎西棟：単位床面積当たりの質量を 1t/m^2 、教室間の間仕切り壁と増設予定箇所との境界壁以外の壁をRC造150mm厚として支持されたと仮定します。西棟南側の震災後の写真は残っていませんが、東棟南側と西棟南側の部材形状はほぼ対称形であるとみなします。図11より、写真左側に東棟の柱が見受けられますが、見取り図に柱型は反映されていないため、柱の形状は考慮せず、壁と柱の平均応力度により評価します。

■トイレ棟：単位床面積当たりの質量を 1t/m^2 、四周をRC造150mm厚の壁で支持されたと仮定します。

これらの仮定に従って、建物の被害と関東地震の地震動について考察を行います。

図15に文献4より志賀マップの縦軸をSI単位に書き換えた図を示します。志賀マップは、志賀敏男氏によって提示されたものであり、1923年の関東地震より後の1968年の十勝沖地震における鉄筋コンクリート造建物の被害を壁率、柱率に基づき判別できるようまとめられた図です。

図15の横軸の $A_w/\Sigma A_f$ は壁率と称され、1階におけるRC造壁の水平断面積の各（張り間、桁行）方向の総計、すなわち壁量 A_w を、1階以上の延床面積で除した値です。ここで、文献4の判断を踏襲し、 A_w を算出する際、袖壁以外は、長さは600mm未満のものは除外することにしました。

図の縦軸の $\Sigma W/(A_c+A_w)$ は壁・柱均しのせん断応力度と称し、その分子 W は建物の単位床面積当たりの質量を 1t/m^2 と見做したときの1階以上の建物総重

量 [N] です。

1968年十勝沖地震において、各建物のデータをプロットした同様の図では、図15の点線で囲まれる範囲のRC造建物が被害建物であったことが指摘されています。1923関東地震と1968十勝沖地震は、地震動の特性が異なるため直接の比較はできませんが、中学関東学院本校舎西棟のY方向においては、1968十勝沖地震にて被害を生じた範囲の建物よりも1.12倍程度、大きな壁量であったと考えることができます。

表2に、求めた建物の鉛直方向支持部材のせん断応力度の一覧を示します。ここでの鉛直方向支持部材、とは、屋根の重量を支える所謂柱や壁をさします。本校舎西棟の壁・柱の平均せん断応力度は、Y方向にて 2.91N/mm^2 程度であり、現行のRC造建築物の耐震診断の1次診断における方立壁の終局強度 1N/mm^2 、袖壁の終局強度 2N/mm^2 を上回り、耐震壁の終局強度 3N/mm^2 を僅かに下回り、1968十勝沖地震被害建物において指摘される大破、崩壊した建物の壁・柱の平均せん断応力度 1.2N/mm^2 を大きく超えることから、部材が高い応力に達し、破壊を生じたと考えられます。

図15より、大正関東地震で被災した中学関東学院本校舎の構造体の枠割を果たした壁の量をおおよそ推定

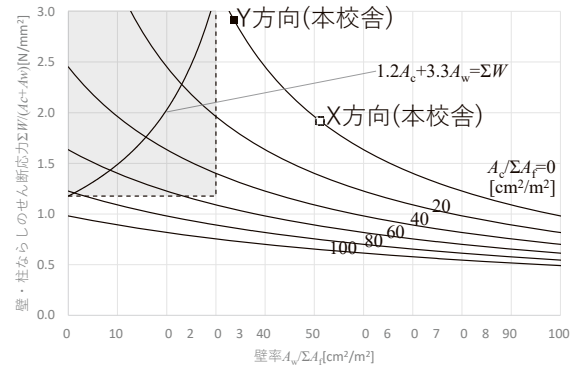


図15 志賀マップへの本校舎データ追記

することができました。図15において定めた壁量を元に、壁の平均せん断応力度を仮定し、当該建物を被害に至らしめた地震の応答加速度を推定します。表3に、建物の重量と2階床面に生じた加速度の大きさを示します。

表3より、関東大震災後も継続使用されたトイレ棟は、応答加速度 $2g$ 程度の地震動により終局に達すると推測されます。よって、2階床面において $2g$ に相当する応答加速度は実際には当該校地では生じなかったと考えられます。

表2 (a) 鉛直方向支持部材のせん断応力度の算定結果その1

名称	検討方向	ΣW [kN]	平均せん断応力度 [N/mm ²]			
			1階壁 *	柱終局時 **	柱と壁の終局時 ** (中間値)	壁終局時 **
本校舎西棟	X	8117	1.92	0.7	1.6	2.5
	Y		2.91	0.7	1.6	2.5
トイレ棟	X	335	0.23	0.7	1.6	2.5
	Y		0.51	0.7	1.6	2.5

ここで、 ΣW : 1階以上の建物の総重量

* 地震動により1G相当の慣性力が水平荷重として建物に作用したときの数値

** 建物の耐震計算ルート1判定用の数値

表2 (b) 鉛直方向支持部材のせん断応力度の算定結果その2

名称	検討方向	ΣW [kN]	平均せん断応力度 [N/mm ²]			
			1階壁 *	方立壁 終局時 ***	袖壁 終局時 ***	耐震壁 終局時 ***
本校舎西棟	X	8117	1.92	0.7	1.6	2.5
	Y		2.91	0.7	1.6	2.5
トイレ棟	X	335	0.23	0.7	1.6	2.5
	Y		0.51	0.7	1.6	2.5

ここで、 ΣW : 1階以上の建物の総重量

* 地震動により1G相当の慣性力が水平荷重として建物に作用したときの数値

***RC造建物の耐震診断(1次診断)評価用の数値

表3 各棟2階床面応答加速度の算定結果

名称	層	検討 方向	ΣW [kN]	m [t]	T_1 [s]	C_i	Q [kN]	ΔQ [kN]	$\Delta Q/m$ [m/s/s]	
本校舎西棟	1	X	8117	414	0.2	0.834	6,768	2,611	6.31	= 0.643 g
		Y				0.549	4,456	1,719	4.15	= 0.423 g
トイレ棟	1	X	335	34	0.1	4.433	1,485	1,485	43.47	= 4.431 g
		Y				1.961	657	657	19.23	= 1.961 g

ΣW : 1階以上の建物の総重量、 m : 1階の総質量、 T_1 : 建物一次固有周期の略算値、 C_i : 層せん断力係数（地震による慣性力を建物重量にて除した値）、 Q : 層せん断力（ここでは1階以上部と基部のせん断力）、 ΔQ : 地震により建物に作用する荷重（ここでは2階床面に生じる水平荷重）、 $\Delta Q/m$: 地震により建物2階床面に生じる加速度

同様に、関東大震災により大破した本校舎西棟は、Y 方向、すなわち南北方向に応答加速度0.4g 超程度の地震動を経験することにより、鉛直支持部材の終局に達したと考えられます。一般に剛性を高めた、硬い建物では1階床よりも2階床における加速度が増大し、1階床面に対する2階床面における加速度応答倍率を勘案すると、同校地における大正関東地震の地動加速度のピークはY 方向、すなわち南北方向に0.4g 超程度であったと考えられます。地震動については、文献3)に記述があり、東京帝国大学地震学教室に設置された今村式2倍強震計の地震動の記録では、最初の大きな揺れで南北方向に振り切れた、とされており、この方向と本校舎西棟の耐力が小なる方向とが一致したことがわかります。

6. まとめ

大正関東地震後も姿をとどめ継続使用された中学関東学院トイレ棟は、応答加速度2g 超程度の地震動により終局に達すると推測されます。

大正関東地震で大破した中学関東学院本校舎西棟は、南北方向に応答加速度0.4g 超程度の地震動を経験することにより、鉛直支持部材の終局に達したと考えられます。1階床面に対する2階床面における加速度応答倍率を勘案すると、同校地における大正関東地震の地動加速度のピークは0.4g 超程度であったと考えられます。

謝辞

この度は、執筆の機会をいただき、ありがとうございました。

本研究で、考察の対象とした資料の多くは学院史資料室事務室より提供を受けました。本学卒業生の新井みさき様には、トイレ棟の平面の根拠図面の情報など、貴重な資料を紹介いただきました。また、小生がキリスト教と文化研究所所長担当時の坂田祐日記の研

究会の経験が、当時の状況を想像するに大きな助けとなりました。この場を借りて、関係各所に心より御礼を申し上げます。

参考文献

1) <https://www.geocoding.jp/> (2023年8月17日最終閲覧)
2) <https://vldb.gsi.go.jp/sokuchi/surveycalc/surveycalc/bl2stf.html> (2023年8月17日最終閲覧)
3) 神奈川県立歴史博物館：「80年目の記憶—関東大震災といま—」, 2003.7
4) 志賀敏男：『鉄筋コンクリート造建物の震害と壁量, コンクリート工学』, Vol.28, No.9, pp.46-47, 1990.9
5) 関東学院大学建築・環境学部建築エンジニアリングコース：『関東学院の校舎や国宝円覚寺舍利殿を通して読み解く関東大震災』, 第8回防災推進国民大会, PS-55, 2023.9 (ポスター発表)
6) 『International Cooperation at the gateway of the orient, An educational challenge from Japan』, p.5, June 1921.
7) 横浜開港資料館所蔵：JAY H.MORGAN 建築図面
8) 長濱みさき：『関東学院中学校高等学校における校舎の変遷—創立（1919）から戦前（1945）まで—』, 2013年度関東学院大学工学部建築学科修士論文・卒業研究概要集, 2014.3
9) 『物語風 坂田祐見聞録』, 『燦葉』, p.117, 2018年12月16日

坂田祐『新編 恩寵の生涯』より転載、 「関東大震災 一神の護り」、P132-135

坂田祐は著書の中で、関東大震災の体験について詳細に記しています。

100年経った今、当時関東学院に何が起きて、坂田祐はどのように思っていたのかを読み返したいと思います。

学院史資料室事務室

関東大震災 一神の護り

大正十二年四月、開校五年目、御恩寵の下に、中学としての関東学院は完成した。鉄筋コンクリートの校舎は、その第一期工事としての部分が竣工した。後期エリザベス式とかいう古城みたいな堂々たるものであった。英国人技師の設計であった。日本の地震はいかに恐ろしいものであるかは知らなかったであろうが、鉄筋コンクリート校舎は地震には絶対に安心だ、もし生徒が外に出て運動したり遊んだりしているときに、地震があったら、校舎の内にかけ込んだ方が安全であるといわれたものであった。しかしそれは大へんな誤りであった。大正十二年九月一日の関東大震災はこれを証明した。校舎の予定計画の最後の部分、本館の一翼、鉄筋コンクリート二階建の建築に着手し、まさに基礎工事を終ろうとした時、関東一円にわたり大地震が起った。

私は夏休みでも毎日学校に出ていたが、大てい午前中であった。然るにこの日に限り、予定を変更して、午後学校に出る積りであった。正午少し前、食卓に向って、家族のものと話していた時に、俄然、大震動が起った。天地がひっくりかえるように感じた。妻と娘と妹は食卓の下に頭を入れたが、私は窓から外に飛び出して家族のものをも外に出した。屋根瓦が落下して私の背中を強く打ったが幸い負傷しなかった。家はまださかんに揺れているが、私はその中に入って洋服に着かえ、靴をはいて、また外に出た。家族のものにも必要な服装をさせた。家が傾いたけれども倒れなかった。しかし近所に火災が起った。だんだん延焼して私の家にも迫って来た。学校がどうなったか心配であるが、目前に迫ってくる猛炎から逃がれなければならない。

私は娘をおんぶし、妻は東京から連れて来た愛犬を引き、妹と女中には重要な書類を入れた行李をせおわせて、安全と思われる方に逃がれた。火はあとを追うようにおっかけてきたが、風向の関係で私の家は焼けなかった。少し離れた隣の二階建の住宅はベチャコに倒壊した。この家には私どもが東京から引越し、

数年住んでいたが、少し前に現在の家に移転したのであった。もし移転していなかったら、圧死したにちがいはなかった。

午後四時頃であったか、学校に出ていたT教員が、猛火の間を通りぬけて帰って来ての報告に、学院のあの鉄筋コンクリートの校舎が破壊され、教員と給仕の二人が多分校舎の中で圧死しただろうとのことであった。高田教頭は二階の室で教務の仕事をしていたが、震動と共に窓から飛び下り足に負傷したが、勇敢に行動して、地階にある理科の実験台の下にかくれていたY教員と、M大工父子を救い出したとのことであった。T教員の家は私の家の近くにあったが、全焼した。私の家は焼け残った、余震が激しいから中にはいることはできない。時々危険を冒して食糧や衣類を取り出した。この夜は家から少し離れた空地に野宿した。月が出て明るい夜であった。余震が頻繁にやって来る。近所の人々も家財を運んで来て野宿した。私どもはさし当り必要な食料と衣類の外、家財はそのままにしておいた。盗賊もあるらしく、少しは盗まれた。

翌日私はまだ燃えている火の間を通り、焼けただけ多くの死体に弔意を表しながら学院にたどりついた。あの毅然と聳えた鉄筋コンクリートの校舎、日本一などと誇ったそれが、一瞬間に碎かれてしまった。偉大なる自然の力と微小なる人間の努力を痛切に感じた。犠牲になったのは、O教員とS教員とK給仕の三名であった。時は夏休中で生徒は登校していなかったので幸いであった。鉄筋コンクリートの校舎は、地震には大丈夫だときかされていたので、その驚きは大きかった。校舎の中央階下に院長室があった。これは一番ひどく破壊されて、院長室係の給仕がそこでつぶされた。もし私が出勤していたら給仕とともにつぶされたであろう。或いは給仕は用事のために室の外に出て助かり、私はやられたかも知れなかった。日露戦争で幾度か死線を越えて助かった私は、今また死をまねがれたのである。神様はご用のためにまだ私を生かして下さったと信じ、このご恩寵に対し謹んで感謝の祈りをささげたのであった。

この大震火災に、母校を心配してかけつけて来た三

名の生徒が、余震でぐらぐら揺れている校舎に飛び込んでタイプライター七台を出した。このタイプライターがどれだけ役に立ったか知れなかった。他の器具、図書等は市街の火災が延焼して来て、全部焼失した。

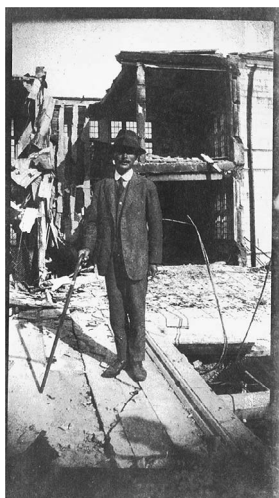
市の中央から離れた西の方にある姉妹校、捜真女学校は、木造であったが、倒壊を免かれ、火災にもあわなかった。関東学院はこの校舎を午後借用して授業を開始した。大震後一ヵ月たった十月十五日であった。生徒の被害は死者の分ったもの三名、生死不明三十

名、生徒総数五四六名中、十月までに四〇〇名登校するようになった。

学院校地の上段の空地に、仮校舎を建築中、翌年一月十五日、再び激震あり、工事半ばに倒壊した。これを復旧して竣工し、二月末日捜真女学校より移転した。

かく、重ね重ね災害にあったが、ご恩寵により支えられ、勇気づけられ、前進することができたことは、真に感謝にたえない次第であった。

(原文のまま)



倒壊した建物を調査する坂田祐



倒壊した本校舎



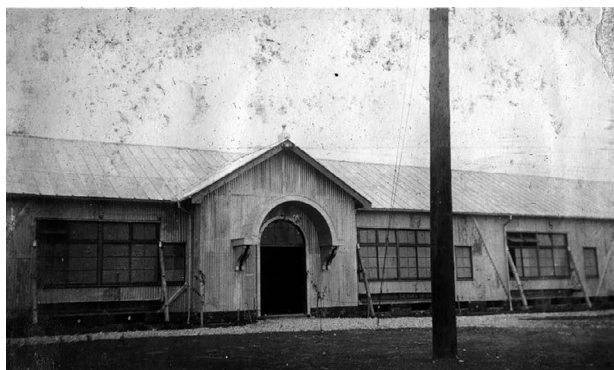
倒壊した建物を調査する坂田祐と役員



震災後の仮校舎、坂田祐（左）と整列する生徒



倒壊した建物を調査する坂田祐と役員



震災後の仮校舎

「2023年度関東学院教員合同研修会」より 東北学院 大西晴樹院長・学長、関東学院 松田和憲学院長 対談

日時：2023年7月25日（火） 場所：横浜・関内キャンパス

（以下、敬称略）

松田 「私は宣教の課題でよく問題にされている天皇制の問題が、天皇制国家主義とキリスト教という大きなテーマ、中心があったのかということで、天皇制の問題は今なお抱えている問題だと思います。日本人のアイデンティティに関わる本質的な問題で、政治的な国家権力として、教育勅語、内村鑑三不敬事件、御真影に対する最敬礼だとか、忠君愛国の士気を上げるだとか、そういうのをみんな靖国神社問題、これも天皇制との絡みで推移したのかなという辺りで、あと植民地の問題も、この辺りを少し深め、ナショナリズム、天皇制、絶対神というものを少し話していただきたいと思います。そうした中でもそういう限界、限定付けの中で、それに関わらずキリスト教学校が何とかそこで格闘しながら、結束をしながら生き延びていった、そして最終的には戦争に突入する間、色々な部分で戦い終わりましたが、それなりの歴史的な役割を果たしたという辺りをもう少し詳しく述べていただきたいと思います。」

大西 「宣教師によって種がまかれまして、開港の地にキリスト教学校ができると、それが今度は内地雑居と言いますが、宣教師が今度は居留地だけではなく国内まで出かけて行って学校を建てられることが相当な脅威だったと思います。この勢いでキリスト教学校に広がっていけば日本の国あるいは日本の文化はどうなるのだろうという思いを持たせるほど、非常にキリスト教会、及び、キリスト教学校が活発になってきました。それで、キリスト教が正式な学校、中学校、高等学校であるならば認めないといった訓令第12号に結びつく訳ですが、そこで一つの壁にぶち当たる訳です。

それがキリスト教にとっても試練だったと同時に、都市の日本も経済発展してまいりますので、次第に産業革命によって工場ができ、都市ができてくるということになると、今度大正デモクラシーの担い手達が都市に集まってまいります。そういう時に日本全国伝道が行われて都市にも教会ができる。明治のキリスト教というのは結構農村中心の広がり方を持っていて、農村の有力者が教会を支えるという感じでしたが、今度は大正期になってくると、都市の知識層が教会に結集してくるということがありました。確かに政府はそういう形をとって来たにも関わらず、キリスト学校、キ



リスト教会もそうだと思いますが、今度は大正デモクラシーのような考え方をむしろ進める役割を果たす、吉野作造もそうでしたが、そういうような流れができる訳です。ただ単に為政者側が、天皇中心の特殊旗を掲げようとも、人間の平等とか自由とか、そういった精神の拠りどころとして、場所として、居場所として、教会が果たした役割というのは引き続き私は強力だったのではないかと思います。」

松田 「そしてよくキリスト教は知識層の宗教だということを、最初明治時代は農村一般大衆をターゲットとしていた。それが色々な事情で。」

大西 「先生がおっしゃるようなところ、弱点、それが強みでもあり、弱みでもある。キリスト教の日本における姿みたいなものが明確になってくるのです。」

松田 「そして知識層からその理論的な力とか、そういう体系化においてはきちんとした教義だとか教理だとか、そういうものを構築できたという部分はありました。ただ大衆性という面では、一部の人に限られたといえますか、対象者が狭められましたね。」

大西 「日本の教会の特徴でしょうね。非常に教義や礼拝はしっかりしていますが、ただ支持層が少ない。韓国のキリスト教と比べると随分違います。」

松田 「そういう背景でなったのですね。先生が先程おっしゃったことでいうと、その天皇制の軍国主義化

とか不敬化に対する厳とした動きはありましたが、それに追従しない独自の道を歩もうとする力も一方ではあったということでしょうか。」

大西 「ただそれが時代の難しさの中で翻弄されたと思います。根本的に天皇制追従にならなかったのは、寺社参拝論を見てもそうですが、神社非宗教論を許容する、自分達はキリスト教、クリスチャンとして心から神社にお祈りするのではなく、これは国家儀礼に過ぎないのだから、そこでこれは妥協しようではないかということが、そういった意味で生き残ることができましたし、それは結局のところ力をなくしていったのではないかと私は思うのです。」



松田 「もう一つ、訓令第12号が出た後で、キリスト教学校が生き延びるための得策として、専門学校等ということでその時できる最善を考えたといいますか、名誉とか知名度とかそういうものにとらわれなくて、キリスト教学校としてのミッションを大事にするという面で、ある意味ではそこで一步引き下がったといいますか、天皇制国家主義の中でキリスト教学校は色々な活動をしなが、そこでキリスト教学校教育同盟が井深梶之助さんをリーダーとして、そこで発足し、長い歴史を刻んでいったというのは先生の書かれた『キリスト教学校教育同盟百年史』の中でも謳っていらっしゃいますが、そのことが意味有る事柄だったのですね。」

大西 「ただ単に抵抗するというだけで終わったのではないという、私は百年史を書いた時にそう述べたと思いますが、教育同盟の発足は訓令第12号に対する抵抗だけではありませんよ。幻があったと。幻は何かというと、これ井深先生ですが、エディンバラでの世界宣教会議で、国際大学、要するに一流の大学を作りたいと掲げていて、それに皆さんは同調しながら教育

同盟が特に高等教育の方では運用されてきたと思います。だからICUは成功できましたが、それ以前にもチャンスがあれば欧米からの支援があって、そういう環境を整えるならば帝大に負けないような、キリスト教の私立学校を作りたいというのは底流として連綿とあったと思います。ですから関東学院と明治学院の共同事業とか、そういう流れの中でとらえるときよくわかると思います。」

松田 「2番目のお話に入らせていただいて、関心を持ったのが戦後、唯一の日本におけるキリスト教の教会ブームが1960年代にあって、そしてそれと期を同じくするような形で戦後ミッションの非常に大きな人的、財的援助によって、ミッションスクールというのが出ていく。それによって日本のキリスト教学校が、数の面でも人の面でも大きくマスプロ化、ある意味では世俗化という形にもなりましたが、規模的にはずっと大きくなったというようなことです。」

そして我が関東学院のことを振り返ってみると、1970年代、80年代は黙っていても学生が入ってきてくれる、その中でキリスト教教育とかキリスト教ということ振りかざす必要もないといいますか、そうすると学生が来てくれる、入ってくれるということで、どんどんマスプロ化し、世俗化へと移行していく形で、関東学院はその最たるものでした。

その中でキリスト教学校としての面目を保つといいえますか、内実を保つというのを、東北学院において既になさっておられます。先ほど先生がおっしゃったことかというと、キリスト教の基本である礼拝とかキリスト教学、聖書科とかそういうものを厳として守るといいいますか、礼拝も形骸化したり、そういうものは余り意味がなかったりという、全くその形骸化するような流れが一方ではあったと思いますが、その中で厳として守り続けたものというのが今も生きているのかなということを考えて、ミッションスクールということと今のキリスト教学校という辺りの経緯を少し。」

大西 「先生がおっしゃられたように、戦前の苦勞に比べると戦後は全く別世界で、逆に追い風が吹きますから、各キリスト教学校はアメリカからの援助があり、それから英語が強い、それぞれ高等教育においては商学部、商業学部、高等商業を持っていたために経済学部が発展するという一方で、日本の経済成長と重なるように成長していく姿がキリスト教学校でも見られました。」

その結果は学生数も増え、クリスチャン教職員は少なくなり、そうではないクリスチャンではない教員が

多くなってきて、非常にどこの大学も苦勞したと思いますが、そこで先生がおっしゃる礼拝を守り、キリスト教学校の核をきちっと決め、極力それに取り組むという姿勢が大分薄らいできたということが世俗化という言葉ででしょうか、あったと思います。

世俗主義と世俗化は違うというところです。世俗主義というのは全く聖なるものとは背を向けたものです。世俗化というのは聖なるものを中心にそれがだんだん薄らいでいきましたが、その核心が残っていて、決して世俗から全部消えてしまう訳ではない、というところで、世俗主義はまずいですが、世俗化とは受け入れざるを得ない事実ではないかと思います。

日本社会はキリスト教学校があったからとは言いませんが、キリスト教的な考え、戦後憲法もそうですが、大分慣れ親しんできて、そのキリスト教で特に信仰者ではないですが、キリスト教的な考え方はできる人達も随分育ってきたと思います。そういう意味では社会も変容してきた訳です。

その中でキリスト教学校が膨らんできて世俗化していく、だけど世俗化は仕方のないことだということの中で物を考えていきたいのですが、そうなると核にある部分は決して失ってはいけないと思います。ただそれを、今のカルトではないですが、強権的にそれを押し付けたりすることはできない、だからいかにキリスト教学校は持っているプラスの部分というものに改めてまた目を向けて、これだけ今の人間が、情報を自由に、自然を破壊し、やりたい放題やっている訳です。

この中で神の前に立ち返って、あるべき人間はどうであるか、あるべき社会はどうであるかということを経キリスト教主義の観点からもう一度整理して、そこからまた出発していく、人間教育をしていくということがあれば、私はキリスト教学校というのは世俗主義の中で潰れるのではなく、世俗化の中で十分生きながらえる、そういうような考え方を持っています。」

松田 「私がチャプレンとして、大学宗教主任として、十数年に渡って力を注いだことは、学生がキリスト教を必修の形で知識として教科として学ぶことがあっても、礼拝に参加するということを何とか学生達に徹底したい、しかも押し付けでなく、またゴリ押しではなく参加できるような道がないだろうかと考えました。関東学院の場合は、中高とか小学校とか子ども園は礼拝というものを非常に大事にしています。

一番学生数が多い大学はもう片隅に追いやられてしまっていた、ある意味では風前の灯火みたいなところがありました。それを色々なことで戦いながらたどり着いた結論は、キリスト教の一環として、教育の中

の一つとして、礼拝にも参加を促すということで、ある種、礼拝を奨励する形で、しかし私は、出席カードは取りましたし、アンケートでコメントを書いてもらいますが、出席しなかった学生でも減点はしたことがありません。」



大西 「よく聞きますが、困ったときに心の中で口ずさむ歌は讃美歌だったりすると。全く学生時代から教会、キリスト教的な世界から離れていても、学生時代に歌ったあの讃美歌はいつも自分の中で繰り返されることがあるという話をよく聞きます。だから私は心の教育ということ言えばそれでいいと思います。知識は教室で教える訳ですが、心の教育はではどこでなされるのだろうかという、礼拝を置いて他にないと思います。

私が研修会の講演の最後に言いましたように、キリスト教学校は聖書を読み、礼拝が離れていったらどこでキリスト教の心の教育がなされるのだろうか、人間の成長を考える時に非認知能力という言葉が表現されますが、認知力としての知識は廃れますが、神との関係といいますか、人間の心の教育、心の目を養う教育というのは、宗教、キリスト教学校におけるキリスト教教育をおいて他にないので、しかもそれはどこでなされるかというと、教室だけではなくて礼拝という場の中で深く物事を考える、あるいは感覚的ですが事柄を内面的に受け止める、そういったことがあると心の目が開かれていくのではないかなと思います。

だからキリスト教、クリスチャンにならなければダメだというレベルではなく、そういう世界宗教の方が自分の心の中にあるということがその人の成長を促す部分がかなりあるのではないかと思います。

そういう意味で、キリスト教学校のキリスト教というのは教室のキリスト教ではなく、教会とつながっているところの聖書の解釈であり、礼拝、讃美歌、神に対する賛美であるというようなところは非常に心の教

育として大切だろうと、それを持ち得ないとキリスト教学校は廃れていくのだろうと思います。」



松田 「それとの関連で言いますと、私、宣教学を少し専攻して、日本ではその宣教が難しいですが、教会に導かれる世代というのは10代とあと40代です。40代が社会に出て行って、色々と社会の現実と揉まれて行き詰まりを感じ、何かの問題で苦しんだ時に小学校や中学校で行った教会とか、キリスト教学校で出た礼拝の聞いたメッセージとか、そういうものが蘇ってくるといいますか、ぬくもりを思い出して、そして復帰するといいますか、現状復帰のような感じで帰っていくところでは、パーセンテージとしては少なくないといえますか、そうすると種はまかれているといえますか、それを長いスパンで見ているとキリスト教学校で行う礼拝というのは大変大事な要素かなというように思います。」

大西 「私は仙台の大学を経験していますが、東京の大学ではほとんど礼拝への出席が少ないという状況を私自身経験しておりました。

他にも色々なことがあるから仕方ないという風に考えたこともあります。仙台の大学で礼拝に出ている学生達を見ていると、それなりのものを彼らの中に埋め込まれているといえますか種をまかれていて、それで同窓会等、地方では活発ですから、同窓生に会いますと、「LIFE LIGHT LOVE」、東北学院の校訓ですが、「きちっと教えてください」とよく言われます。

経済人からもそう言われて、これが役に立ちますという風に逆に言われて、これはお金とかそういうレベルの話ではないだろうなと思います。」

松田 「最近少し気づいていたのが、礼拝で話をし、例えば私が担当で12、3分話す、その後に学生にコメントを書いてもらう、礼拝が終わってたった4、5

分で書いたコメントを後で見ますが、結構きちんとしたレスポンスが返ってくる、何回かそれに関わっていると、どこか琴線に触れるみたいな部分の言葉に出会うと、本人の内面に変化が起こるのだと思います。それもキリスト教教育の大きなファクターかなというように思っています。

少し最近思うのは、大学教育がややもすると実学中心主義で、すぐ手っ取り早い役に立つということに移行してしまって、そうすると専門学校であるとかものづくり学校とどこが違うのか、リベラルアーツとかいうそういう人格教育というものが片隅に追いやられているという傾向があるのかなという、それをどうやってキリスト教学校としてはそれを堅持していくかとか保持していくかという辺りが一つ大事な事かなということです。あと先生が出してくださった中で非常に関心があるのは、震災学のところやボランティアセンターの立ち上げとかその辺も後で少しお聞きしたいのですが。」

大西 「私はそういう視点で見た時に、坂田祐先生の「人になれ 奉仕せよ」、これは非常に言い得て妙な校訓だと思います。

実は明治学院にいた時に校訓が変わりました。「学問はあなた方を自由にする」「真理はあなた方を自由にする」とうのが大学のスクールモットーでしたが、それが「Do for others」他者への貢献、これがどこから来ているのかと考えるとフェリスが「For Others」。関東学院の場合はまず「人になれ」という、神との前の人間を規定した上で「奉仕せよ」ということです。これが一番、今先生が投げかけた疑問に答えている校訓ではなかろうかと思います。

まず人間とは何かということを理解した上で、人の役に立つということが大切なだろうと、自分のために人に役に立つのではなくて、人として人の役に立つということがなければ、ただ単にそれは自分の利益を増やすことになるだろうと思います。

共同体から切り離された個人が教会を作る、個人の集まりとしての信仰共同体ということで、教育制度から切り離された新しい自由教会のモデルを作った訳です。それは教会が離れたということは地域からも切り離されたということだったと思いますが、そこに一歩立ち止まって、地域に対しても貢献するという、そういったファクターも入っている。関東学院がそういう意味では「人になれ 奉仕せよ」という言葉によってですね、今社会事業連携とか新キャンパスを中心に進めようというのは非常にスクールモットーにはなかった話ではないか、すごく可能性があるのではないの

か。先生がおっしゃるように、「人になれ」という部分でしっかりリベラルアーツというのは何であるか抑えた上でそれを進めていけば私は大変な力になるのではないかと思います、その辺、先生いかがでしょうか。」

松田 「大変優れた校訓かなという風に思います。それをいかに内実化するか、具体化するかということが卒業生や在校生などにも一緒に考える一つの大きなテーマになっているのは確かなことだと考えます。例えばボランティアズムや震災学ということ、私は今回東北学院にお邪魔した時に、3.11の震災、東日本大震災を契機に、東北学院として関わったその歴史を書物にしっかりと残して、記録されているのを見て、私達もそこから学ばせていただいた方が良いのではないかと、ということを強く感じました。

先生のパワーポイントの中で震災学というのをきちんと学科として位置づけて、教科としてやられていることもすごく刺激になると思います。」

大西 「東北を知らず、3.11のことも知らないで、私も5年前に赴任しましたが、東北の人達はきちんと知っていて、悲惨さというものを心の中でずっと持ち続けています。

実際に津波で肉親を失った人に何人も出会いました。あの時どこにいた、何していたというのは絶えず彼らの会話の中に出てきました。

私は東京で会議をしていましたという話もするのですが、あの時のこの事柄というのはこの中にしっかり刻まれているという印象が残っていて、あの時というのは本当に一瞬でしたが、人の命を奪っていたということがあり、今こういう時代で先ほど少し震災学という話をしましたが「science of disaster」「studies of disaster」でもいいと思います。というのはものすごくこれから重要な契機になってくるだろうと。

これだけ科学が進み、人々の生活が豊かになったと思いきや逆に、突然、疫病が流行り、戦争の脅威にさらされ、あるいは温暖化で自然災害が増え、こんな時代に我々は生を受けている訳ですが、これをどう自分の中で了解していくのかということだと思います。自分は被災しないからそれでいいと思っていても、被災するときはするような時代になってきます。ある種、宿命とか運命ということではなく、そこに寄り添ってくれるものがあるかないかというのは、被災は免れないかもしれませんが、非常に大きなものになるのではないかと。その時に神が全知全能あるいは創造主というだけではなく、もっと人間に寄り添う人格神である

ということがキリスト教の中であれば、これは相当な慰めといえますか、力を持つと思います。神学者の先生いかがですか。」

松田 「3.11の時に私は宮城県出身だったものですから、1週間位してから三春台の宗教主任の佐藤洋晴先生という方と二人で、車で南三陸まで行きました。

そして私の弟が宮城県・美里町で福祉の社協の事務局長をやっていたものですから、その弟に女川とか色々南三陸を全部案内してもらい、衝撃を受けて帰ってきました。

そして3月末に帰ってきて、ボランティアは準備が必要ということですのですぐには募れませんでした、その後夏休みのボランティアについては、学生から200人を超える応募があり、全員を連れて行く訳にいかないため、面接を行いました。その結果、学生、教職員約15人を5～6グループ編成しました。バスをチャーターして約1か月の間、それぞれ4泊5日位で南三陸に行きました。」

大西 「関東学院にはボランティアセンターはあったのですか。」

松田 「ありませんでした。南三陸にはほとんど私も参加しましたが、そこで色々なことを勉強して、学生達が本当に泥だらけになってヘドロを集める、それまで投げやりな生き方をしていた学生達が夜のミーティングの中でどんどん内面的に変わって、感謝なんて言葉が出てきて、下手な座学よりもずっとその学生達がそういう中で、苦しんでいる人と対面で話をするとか、その中で学ぶことをアクティブラーニングのような形の意欲といいますか意力といいますか、非常に影響を受けました。

何とかそれを単発ではなくボランティアにしようと思って、センターとして大学もやっている、中高もやっている、小学校も単発的にはやっていますが、それを組織化して、是非センターを作って、困った時にそれではなくて、恒常的にそういうことができるようなものを何とか思いまして。一度立ち上げまで行きましたが、少し頓挫しています。是非東北学院の先駆を見せていただいて、そして是非これを恒常化させたいと。

ネットワークがしっかりしていて、デスクがあって担当者がいて、あといざという時にネットワークがきちんと動くようなだけでもいいと思います。オール関東学院として一つ考えられないかなと。」

大西 「私は阪神淡路大震災の時にそれを経験しまして、明治学院は賀川豊彦の出身校でもあるので、ボランティアセンターが日本の大学でも1番か2番に早いのです。

それはボランティア元年であった阪神淡路大震災、あの時は学生が行きたいと言いましたが、学生に「行くな」と逆に言いまして、試験中だったものですから行ったら全員で留年だよと。それで何とか行かせませんでした、言った以上責任がありますので、どうにか足がかりを作りたいという気持ちで探していたら、その賀川豊彦記念館の方で受け入れてくれるとなりました。それで学生達を送りまして、私も行きましたが、夜被災したお年寄り達が避難しているものですから、しっかり早く寝るのです。合宿で学生と行くといつも大騒ぎしますが、あの学生達がそんな整然とした規律のもとに、地域の人達のことを思いはかって活動している姿を見ると、これは違うなと思いました。先生と同じ経験をしました。

その後ボランティアセンターは明治学院にできましたが、東北学院は逆にその震災をきっかけにボランティアステーションが立ち上がり、それで今全国10大学以上の学校とまだコミュニケーションして、これらの学校は夏休みになると来て、エクスカッションでいろんな地域に行って話を聞いています。

実際の被災の手助けとか、そういうことはないですが、その学びをしています。何とかその宗教キリスト教学校として人々に寄り添うことの意味ですかね、「disaster」というのをどこか違うものではなく、自分達が被災する時代になったのだということはきちっと了解しながら、それはいけないことですが、ある程度宿命的にそうならざるを得ない状況にきています。どうやって了解しながら、ボランティアとして人々がそういうことができるかということを絶えず意識しなければいけなくなっていますね。それが「人になれ 奉仕せよ」だと思います。」

松田 「あっという間に時間が過ぎてしまいました、先生においでいただき講演と対談をさせていただいて、問題がクリアになった部分がたくさんあるのではないかと思います。

大西先生は今、東北学院で院長と学長をなさっていますが、歴史的にも規模的にも関東学院、東北学院はだいたい同じぐらいですね。

これから色々と学ばせていただき、教えていただけたらと思います。本日は本当にお忙しい中、わざわざ仙台からおいでくださりまして大変有益なお話をいただいたことを感謝いたします。

本日はありがとうございました。」

画像、音声提供：政策推進課

編集：学院史資料室事務室

中学関東学院における「福音的キリスト教」の一断面 —内村鑑三・高倉徳太郎 等をめぐって— (三)

関東学院 学院長付（学院史資料担当） 渡邊 茂

関東学院大学「神学部」廃止（1973年）

かつて「中学関東学院」において「院長」（校長）坂田祐のもとで「教頭」も務めた多田貞三は、後年（坂田祐の死去した後）「関東学院大学神学部」について、次のように述べています。《坂田院長建設事業の最後のものは、キリスト教学園の頂点とも言うべき神学部の復興でありましたが、六浦の大学校地に神学部校舎建築のための鉄入れ式に、鉄を入れられた先生の姿を忘れることは出来ません。バプテスト教育の伝統は、あくまで「福音の伝道」であります。学園に学ぶもの、教える者、共にイエス・キリストの生きた道を生きることです。即ち、イエスのみ足跡をふみ進む「人になれ」であります。そして弟子の足をも洗い給うたイエスの如く「奉仕せよ」であります。……昭和四十八年（一九七三）十二月十六日講演》（多田貞三著「バプテストの教育と坂田祐先生」、『多田貞三文集』丸善名古屋出版サービスセンター、1977年、118-119頁）と。

因みに、1973（昭和48）年3月31日をもって、「大学紛争」の荒波を受けた「神学部」は廃止されていました（『関東学院百年史』、666-668頁）。かつて関東学院大学神学部で「教理史」（教理史特講、教会史特講）を担当した「フェリス女学院長の山永武雄教授」（『関東学院百年史』、626-627頁）は、私の所属する日本基督教団白金教会（旧日本基督教会）における先々代の牧師であり、個人的には不思議な偶然を感じています。

21世紀の今日『カール・バルト—神の愉快的パルチザン』（岩波現代全書、2015年）を著した宮田光雄氏は、『福音的キリスト教 [ハンディ版]』（新教出版社、2014年）における解説の「〔付記〕『福音的キリスト教』からバルト予定論へ」で、「このようなバルト解釈は、おそらく日本ではあまり言われてこなかったかと思うのですが、私自身は高倉徳太郎の『福音的キリスト教』を読んで目を開かれたのです。」（同上、250頁）と述べられています。

また、上記白金教会出身の牧師で新約聖書学者（日本新約学会会長）となる松木治三郎は、かつて次のように回想していました。《すると高倉先生はすぐに「そうだ、君のは律法的だ。一応口ではキリストの救し、贖罪、恩寵をいっているが、それが本当に生きていない。君たちはバルトやブルンナーばかりよんでいるが、そこには恩寵にうるおうた心がない……」といいはじめられた。それからはおそろしく激しい、火を吐くようなことがつぎつぎと叫ばれた。》（松木治三郎著「高倉先生の聖書講義その他」、『高倉徳太郎著作集』付録2、新教出版社、1964年4月、4頁）と。

坂田祐の「信仰実験談」（『基督教報』第654号）

かつて、坂田祐は「関東学院長文学士」として、次のように回想していました。《バプテスマ〔浸禮〕を受けてから丁度二十年目である、……二十年前の五月三日にバプテスマを受けた、……又内村〔鑑三〕氏の雑誌で教へられた、聖書は神の語なり之を遵奉すべしと云ふ信仰を起した、〔東京帝国〕大學で高等批評もきいたけれども、実験したことは之が爲めに變はらなかつた、十字架の救は科學的に分析しても解らない之を直感〔直観〕すべきである肉の死の後に靈體を與へられて復活して永遠に生きる即ち十字架の救、復活、永遠の生命、之れ基督教信仰の根本要素である此の根本的要素をかたく握つて居れば決して動かない、今日教會で會員がふゑないのは、此點を缺いて居るからである、教役者諸君もこの犯すべからざる確信と教に殉する精神を以てやつていただきたい。》（坂田祐「信仰実験談」、『基督教報』第654号、1922年6月7日、4頁）と。

20世紀前半、大正後期の日本において、「聖書は神の語なり之を遵奉すべしと云ふ信仰……肉の死の後に靈體を與へられて復活して永遠に生きる即ち十字架の救、復活、永遠の生命、之れ基督教信仰の根本要素である此の根本的要素をかたく握つて居れば決して動かない」と簡潔明瞭に表白する坂田祐は、まさしく内村鑑三の「弟子」であり、また、高倉徳太郎の「同志」であるともいわれ得るのではないかと存じられます。

さらに、「牧師でも神学者でもない」坂田祐が、「今日教會で會員がふゑないのは、此點を缺いて居るからである、教役者諸君もこの犯すべからざる確信と教に殉する精神を以てやつていただきたい」と述べるところからは、20世紀後半の昭和中期、第二次世界大戦後における（同じく内村鑑三門下である）矢内原忠雄の次のような言葉を想起させられます。

《私は、ことわるまでもなく牧師でも神学者でもない。ただの一平信徒であるにすぎぬ……信仰のことについては、専門家も素人も区別はない。信仰はすべての人にわかる共通の真理であり、共通の恩恵なのである。》（矢内原忠雄著『キリスト教入門』の「序」〔昭和二十七年（一九五二年）八月十五日、終戦記念日〕、中公文庫、2012年、5頁。）

もっとも、「ただの一平信徒であるにすぎぬ」矢内原忠雄は、この当時、現職の「東京大学総長」ではありません（同じく内村鑑三門下の南原繁総長の後を承けて）。なお、「無教会」のプロテスタント・キリスト者である矢内原忠雄における「東大総長の伝道」は、21世紀今日の日本においても着目されています（赤江達也著『矢内原忠雄 戦争と知識人の使命』岩波新

書、2017年、218-228頁）。

因みに坂田祐は、深交のある南原繁と矢内原忠雄についても触れつつ、次のように回想していました。《かつて内村鑑三が教育勸語を礼拝〔拝礼〕しないというので、第一高等〔中〕学校から追われたことは承知の事実である。そして東京帝大（東大）は内村鑑三を攻撃しこれを迫害した総本山であった。その一高と東大から、多くの秀才が内村鑑三の弟子となり、その弟子の中から東大の総長が出て二代も続いた。・・・月刊雑誌「聖書之研究」を・・・私は・・・初号から、また先生の著書全部を読んで、間接に先生の教えを受けた・・・教会には何ら予備知識なく、偶然に導かれるまま、バプテスト教会の会員となったのであるが、私の純福音の信仰は、全く内村先生の教えによって確立したのである。・・・一高時代に、明治四十四年十月一日、内村先生の門に入門を許され、先生の弟子となり親しく教えを受けるに至ったのである。同時に入門したのは南原、矢内原両君と他に数名あった。》（前掲、坂田祐著「内村鑑三の想い出」、教文館編『現代に生きる内村鑑三』、34-36頁）と。

その後刊行された、南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克己・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』（岩波書店、1968年）に掲載されている「関東学院大学理事長」としての坂田祐著「矢内原忠雄君と私」と題する文章においては、次のようにも回想されていました。《私が矢内原君と親しくなったのは、内村鑑三先生の弟子となってからである。・・・時は明治四十四年十月一日の日曜日であった。この日入門したのは一高二年の矢内原君、〔東京〕帝大二年の南原繁君ほか数名であった。・・・矢内原君の大学総長時代・・・私は時々総長室にいて会談した。その最後は総長満期の数日前であった。南原君が総長の時に建てた迎賓用の懷徳館につれてゆかれ、午餐の御馳走になってゆっくりいろいろの事を話した。総長の恩給はいくら、学士院会員の年金はいくら・・・とそんな打明け話もあった。・・・一九六一年、一昨年の十月一日は、一緒に内村先生に入門を許されてから、丁度、満五十年になるので、上よりの恩寵を感謝し信仰によって結ばれた半世紀の長い間の友情を感謝する葉書を、矢内原君と南原君に送った。それからまもなく、十二月二十五日クリスマスの日に召されたのである。実に感慨無量である。》（同上、38-42頁）と。その彼らが「内村先生に入門を許され」たときのことは、『矢内原忠雄全集』第24巻〔余の尊敬する人物〕（岩波書店、1965年、297頁）や、丸山真男・福田敏一編『聞き書 南原繁回顧録』（東京大学出版会、1989年、7頁）等にも記されています。

因みに、この『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』が岩波書店から刊行された「1968年」は、「大学紛争」真っ只中の時代でした。（慶応義塾大学出身の）江藤淳による講演録「大学と近代―慶応義塾塾生のために」〔一九六八年一月一六日〕（江藤淳著『考えるよろこび』講談社文芸文庫、2013年、199-237頁）もご参照いただけたらと存じます。

坂田祐と「神学部」の復興

20世紀の第一次世界大戦後（1919年1月）に設立された「中学関東学院」において「院長」（校長）となる坂田祐（バプテスト教会員）が「偶然に導かれ」図らずも、近代日本キリスト教思想界における代表的人物だった内村鑑三（「無教会」）と高倉徳太郎（「神学なくして教会なし」）の二人の「接点」となっているとも存じられること、そして、第二次世界大戦後「坂田院長建設事業の最後のものは、キリスト教学園の頂点とも言うべき神学部の復興でありました」（多田貞三）ともいわれ得ることが想起されますとき、21世紀の関東学院における「神学部の復興」は、（単なる理念ではなく）何らかの形で実現され得る「幻」（ヴィジョン）にもなろうかと存じられます。

「横浜バプテスト神学校」（1884年）からの「関東学院創立150年」（2034年）に向けて、「2023年」は「関東学院大学神学部廃止50年」にもあたります。

20世紀後半昭和後期における「大学神学部」の形成過程と共に、その「崩壊過程」での（大学紛争時の経営的観点を超える）内部的要因を歴史神学的に振り返ることは、21世紀前半将来における大学神学部の「再復興」への前提にもなろうかと存じられます。

「神学部なくして関東学院なし」ともいわれ得る志向（バプテストの組織神学者である清水義樹著『キリスト論』清水正編、新教出版社、1991年、288-289頁参照）を踏まえ、「神学なくして教会なし」を志向し「福音的キリスト教」を説いた高倉徳太郎（「2034年」には「没後100年」）へも着目する機会を得られればと存じます。

本稿擲筆にあたりまして、前掲『関東学院百年史』（学校法人関東学院、1984年10月6日発行）の刊行時に学院長であった柳生直行訳による『新約聖書』の証言を、以前の第24号拙稿と全く同様に引用いたします。

《今われわれが受けている、この世かぎりの軽い患難は、やがて、永遠の圧倒的な栄光に取って代られるのである。われわれは見えるものではなく、見えないものに目を向けている。見えるものは過ぎ去ってしまうが、見えないものは永遠に存続するからである。》（「第二コリント書」第4章17-18節、『新約聖書』柳生直行訳、新教出版社、1985年、378-379頁。）

〔完〕

※初回（一）は『学院史資料室ニュース・レター』第25号（2022年3月）に、続く（二）は、前第26号（2023年3月）に掲載。

※その（一）及び（二）で振り返りました千葉勇五郎〔東京学院長、後に関東学院長〕につきましては、山中弘次著「千葉勇五郎 ― 一五年戦争期のバプテスト派リーダーの葛藤」（日本基督教学会『日本の神学』第62号、2023年9月）もご参照ください。

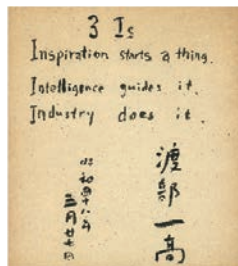
◆史資料の紹介◆（寄贈資料、当室保管史資料）



晩年の渡部一高先生

渡部一高先生の特にニュー・ファミリー・センター（以下、N・F・C）に関する貴重な史資料をご寄贈いただきました。この場を借りまして、改めて深く感謝申し上げます。

ご寄贈いただきました方々：廣瀬 薫様、廣瀬 豊様、武藤 成美様、中山 怜子様



1973（昭和48）年3月27日
自筆の色紙



N・F・Cの講義（年月日不明）



1931（昭和6）年2月21日
関東学院セツルメント
渡部先生宅で行われた卒業生送別会
（後列右から2番目が渡部先生）



関東学院セツルメントの労働学校
（年月日不明）



1970（昭和45）年10月17日
N・F・C20周年記念式

渡部一高（わたなべかずたか）…渡部元（元財団法人関東学院理事長）の長男として1902（明治35）年9月3日に根室に生まれる。東京学院中学部、青山学院高等部、コルゲート大学、オックスフォード大学リンカーン・カレッジ等を経て、1927（昭和2）年関東学院高等部社会事業科開設のため帰国、同科教授に就任、社会学、社会問題を担当。1928（昭和3）～1937（昭和12）年（担当がない年あり）関東学院セツルメントで指導・活動、1939（昭和14）年に関東学院退職、東亜研究所入所。1950（昭和25）年にN・F・Cの設立に参画、理事。1968（昭和43）年に関東学院大学文学部社会科教授。1975（昭和50）年12月9日永眠、73歳。実弟は元大学長の相川高秋。人並外れた語学力をもち、オルガンは独学で学び、読書家で思想・哲学・宗教・史観・人生観は他に比類なく、学識、説得力、魅力的な人柄で多くの人に慕われ尊敬された。

参考：『関東学院百年史』、『関東学院学院史資料室ニュース・レター』No.13・16、関東学院大学文学部『紀要』第21号

◆学院史資料・情報提供のお願い

卒業生、修了生、元教職員の皆さまに学院に関係する資料・情報の寄贈をお願いしております。

お手元にあります学生時代のお写真や学院のパンフレット、式典、学祭の配布物など、大切な記録かと思いますが、学院史資料の収集にご協力いただけますよう、お願いいたします。資料のご提供については当室までご連絡ください。

Tel:045-786-7066, E-mail:archives@kanto-gakuin.ac.jp 学院史資料室事務室

編集後記

大学が新たに横浜・関内キャンパスを開設しました。昨年度迄は近くに関内メディアセンターがありましたが、2022年10月に閉館しました。私は新キャンパスの開設は「関内に戻った」と考えています。1919（大正8）年1月27日、開港記念横浜会館（現横浜市開港記念会館）で第三の源流である中学関東学院設立の披露会が C. B. テンネー、坂田祐ら出席のもと開かれました。その時、関内で授業を行っていたという訳ではありませんが、関内は本学院にとって重要な地であり、原点の一つなのです。関内地区にキャンパスが開設されたことは必然なのかもしれません。

学院史資料室事務室 室長 田中宏治

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第27号

発行日 2024（令和6）年3月1日

発行人 学校法人関東学院 学院長 松田 和憲
編集 学校法人関東学院 学院史資料室事務室
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL.045-786-7066 FAX.045-786-2932



こちら（学校法人関東学院 HP）から
本誌のバックナンバーが閲覧できます。